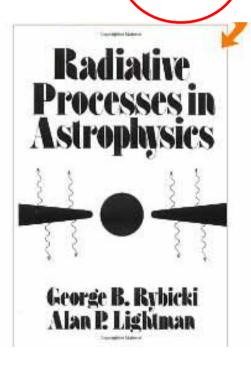
天体物理特論

浅野 勝晃

目標:天体からの放射過程を理解する

天体物理における2本柱





"Radiative Processes in Astrophysics" Rybicki & Lightman

- 1. 輻射輸送
- 2. 電磁波の基礎理論
- 3. 荷電粒子からの放射
- 4. 放射に対する相対論的効果
- 5. 制動放射
- 6. シンクロトロン放射
- 7. コンプトン散乱

数式の変形よりも、論理展開の把握を重視。 議論の前提、観測から導き出せる物理、適用限界などを理解する

成績評価:出席+議論への積極性(+レポート)

http://www.ircs.titech.ac.jp/asano/Rikkyo.pdf

天体物理を学ぶ意義

我々が住む宇宙の歴史を知る

宇宙の観測と基礎科学

- 1687 ケプラーの法則をニュートンが説明
- 1929 ハッブルの観測が宇宙膨張を示唆
- 1932 宇宙線の中から陽電子
- 1937 宇宙線の中からミューオン
- 1947 宇宙線の中からπ中間子
- 1947 宇宙線の中からK中間子
- 1970- 太陽ニュートリノ問題(ニュートリノ振動)
- 1972 BH候補天体Sco X-1
- 1975 暗黑物質
- 1978 連星パルサー(重力波の間接証拠)
- 1979 重カレンズ天体
- 1992 CMBの揺らぎ(インフレーション)
- 1998 加速膨張(暗黒エネルギー)

地上実験は1970年代に完成した素粒子標準理論と無矛盾。しかし、素粒子理論は宇宙観測から要求される、暗黒物質、暗黒エネルギー、インフラトンを説明しなくてはいけない。今後も宇宙の観測は基礎科学の方向性に影響を与えるかもしれない。(今以上の情報を引き出せるか?)

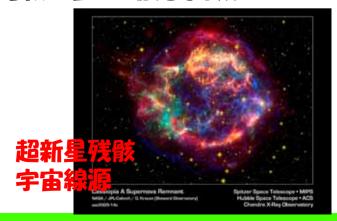
宇宙物理の現状

宇宙論:宇宙の年齢、密度、膨張則、インフレーションなど大枠は確立。

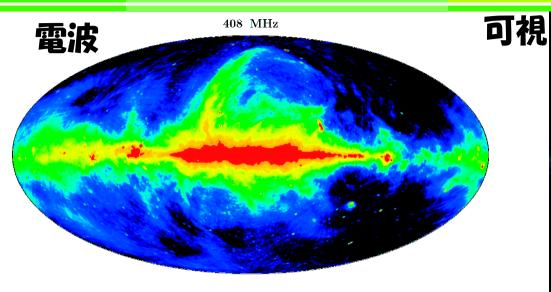
⇒初代天体形成、宇宙の再電離などへ興味は移りつつある。

大体物理:星・銀河形成、 ブラックホールからのジェットなど、様々な課題が残されている。

両分野共、電磁波による観測と理論の比較が主な研究手段。

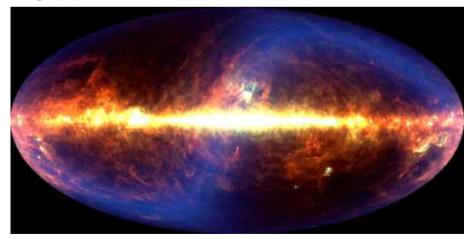


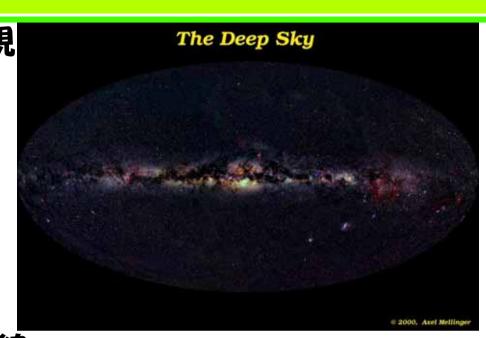
様々な波長で見た宇宙

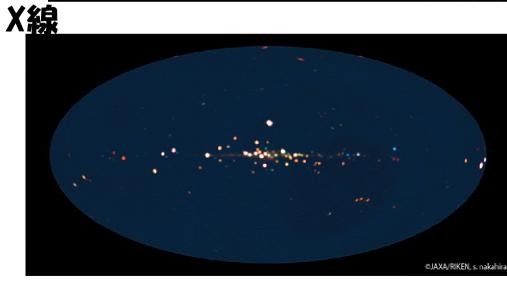


Jodrell-Bank 250-ft + Effelsberg 100-m + Parkes 64-m

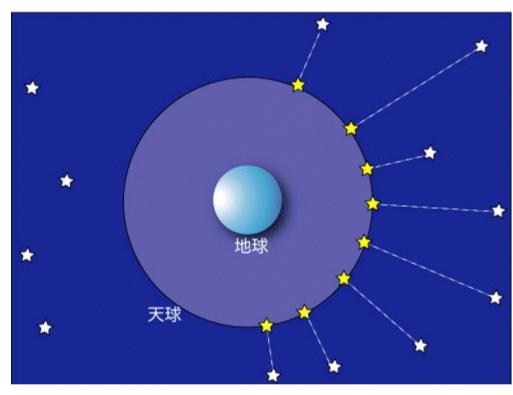
赤外







全天マップ



三次元分布を二次元に射影



地球(等積図法)

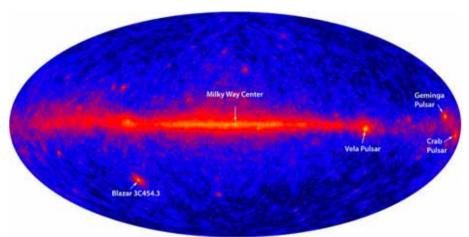


天球

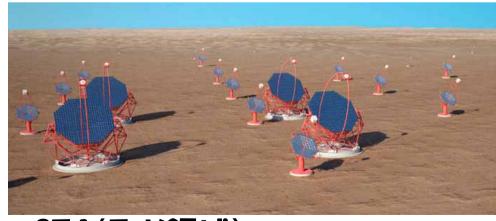


電磁波で探る宇宙: 将来計画の例

ガンマ線観測

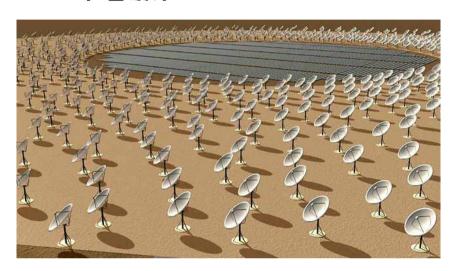


銀河中心からの暗黒物質対消滅 $x + x \rightarrow \gamma + \gamma$ の北候を探す。

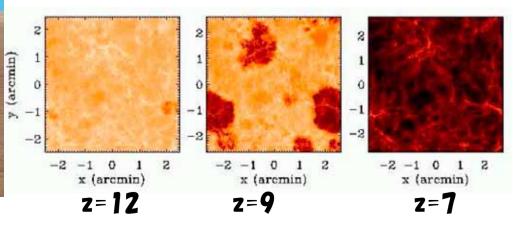


CTA(TeV領域)

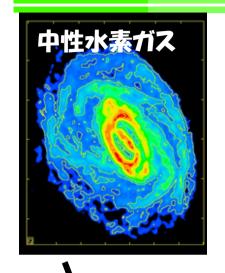
SKA(電波)



初代星からの紫外線で宇宙が 再電離していく様子を探る。



天体の進化における輻射の役割

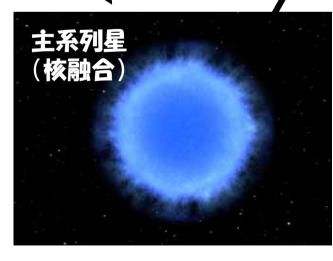


輻射冷却 収縮





輻射により 重力エネルギーを解放





星の中心核で 鉄の光分解 **重力崩壊**



CGSガウス単位系

長さ cm, 質量 g, 時間 s

エネルギー(
$$mc^2$$
): erg = $g cm^2 s^{-2} = 10^{-7} J (g = erg cm^{-2} s^2)$

電子2つの間に働く力
$$F = \frac{e^2}{r^2} [erg cm^{-1}]$$

素電荷
$$e = 4.8 \times 10^{-10} [erg^{1/2} cm^{1/2}]$$

Maxwell方程式
$$\nabla \cdot \boldsymbol{E} = 4\pi \rho_{\rm e}, \ \nabla \cdot \boldsymbol{B} = 0$$

$$\frac{1}{c} \frac{\partial \boldsymbol{E}}{\partial t} = \nabla \times \boldsymbol{B} - \frac{4\pi}{c} \boldsymbol{j}, \ \frac{1}{c} \frac{\partial \boldsymbol{B}}{\partial t} = -\nabla \times \boldsymbol{E}$$

電場と磁場の単位は同じ:G = erg^{1/2} cm^{-3/2}

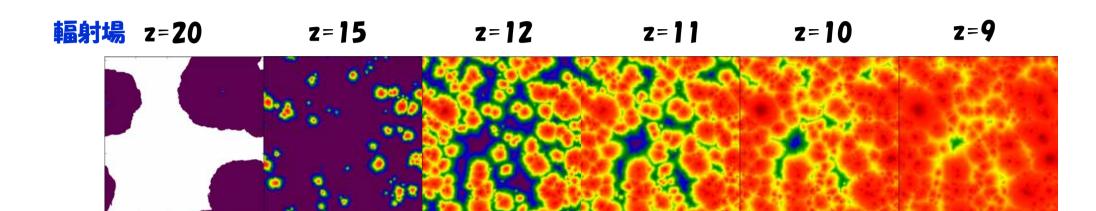
補助単位
$$eV = 1.6 \times 10^{-12}$$
 erg, $pc = 3.1 \times 10^{18}$ cm
 $G, Hz = s^{-1}, K = 8.6 \times 10^{-5}$ $eV, Jy = 10^{-23}$ erg s^{-1} cm⁻² Hz^{-1}
(nG, µG, mG, keV, MeV, GeV, TeV, PeV...)

1. 輻射輸送の基礎

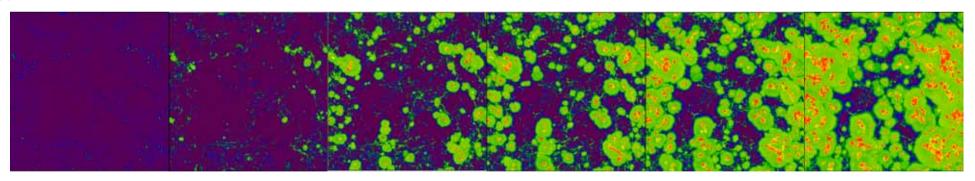
- Intensityの定義
- ・真空中でのIntensityの保存
- 輻射輸送方程式(放射、吸収、散乱)
- ・光学的に深い場合
- ・アインシュタイン係数
- · 拡散近似(Rosseland近似)

幾何光学の世界

輻射輸送計算例:宇宙再電離

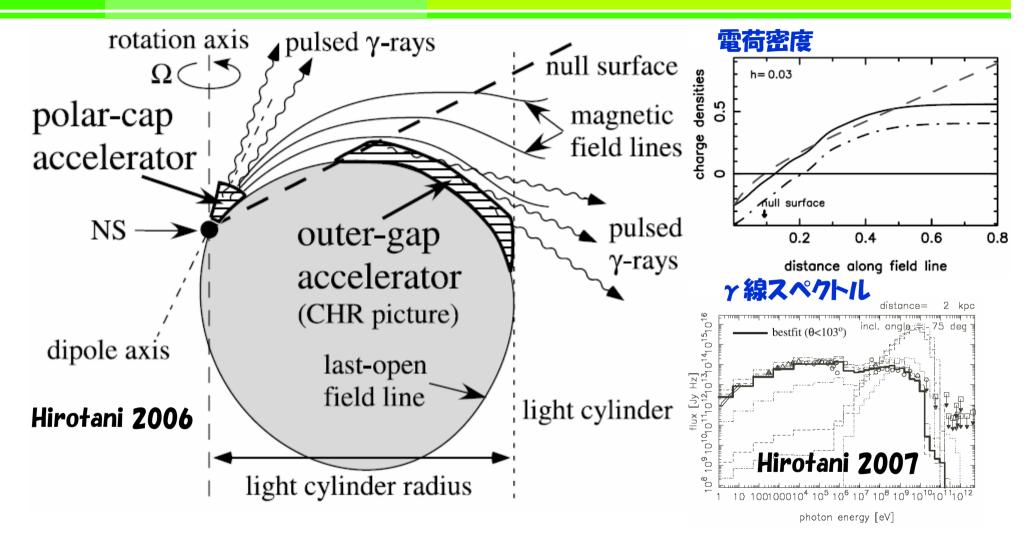


温度



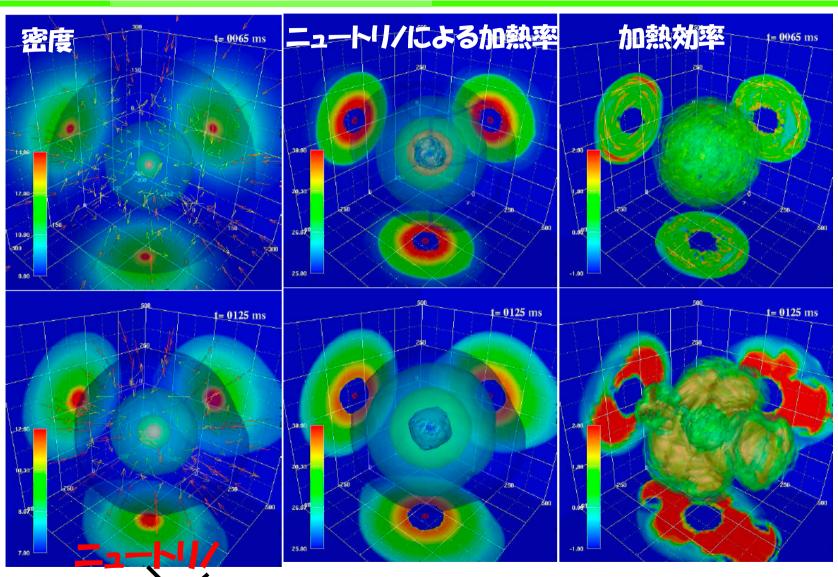
流体計算(宇宙膨張+重力)+星形成 +放射冷却+輻射輸送+化学反応+電離

輻射輸送計算例:パルサー磁気圏



一般相対論+Boltzmann eq.(プラズマ)+電磁場+ γ 線放射+輻射輸送 $\gamma + \gamma \rightarrow e^- + e^+$

輻射輸送計算例:超新星爆発



テクニックは同様

Takiwaki+ 2012

Intensity

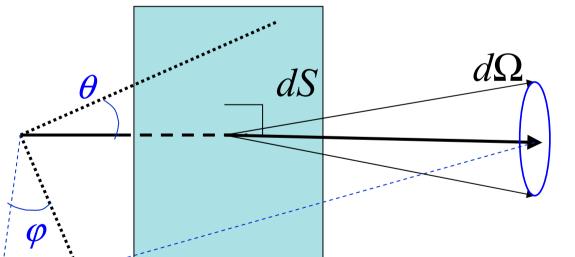
光子の属性

- エネルギー(振動数)
- 軌道(飛んでいく方向)
- 3. 偏光(ここでは扱わない)

$$\boldsymbol{\Omega} = (\theta, \varphi) \quad \boldsymbol{x} = (x, y, z)$$

$$I_{v}(\mathbf{x}, \mathbf{\Omega}) = \frac{dE}{dS \cdot dt \cdot d\Omega \cdot dv}$$

 $[erg cm^{-2} s^{-1} sr^{-1} Hz^{-1}] = [erg cm^{-2}]$



個数
$$n_{\nu}(\mathbf{x},\Omega) = \frac{I_{\nu}}{h\nu}$$

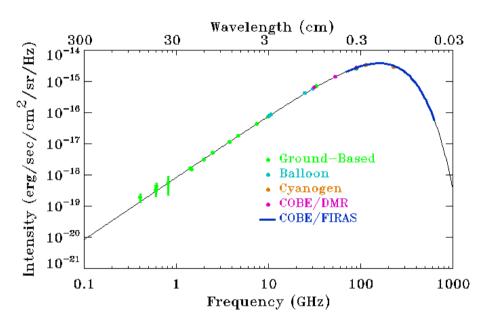
エネルギー
$$I_{\nu} \propto \nu n_{\nu}$$

??
$$VI_{\nu} \propto V^2 n_{\nu}$$

$$I_{\varepsilon} = \frac{dE}{dS \cdot dt \cdot d\Omega \cdot d\varepsilon} [\text{cm}^2 \text{ s}^{-1}]$$

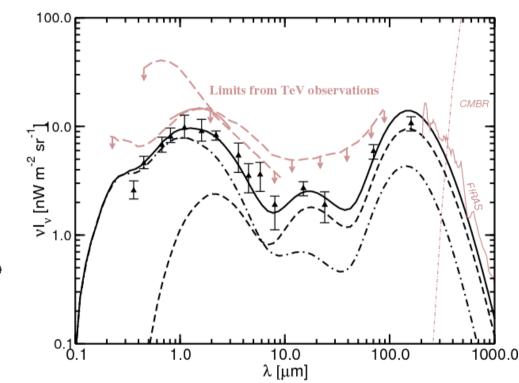
観測されたIntensityの例

CMB(cosmic microwave background)

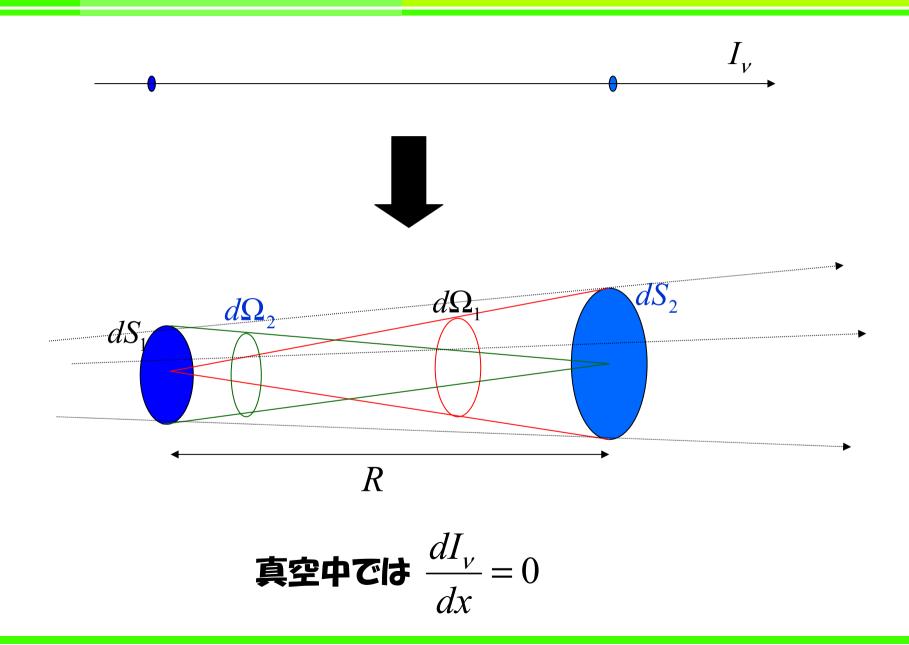


美しいプランク分布

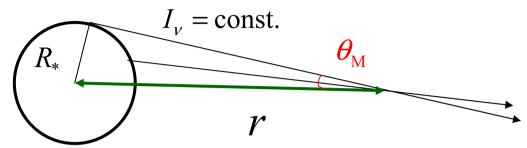
EBL(extra-galactic background light)



Intensityの保存



Intensity&Flux

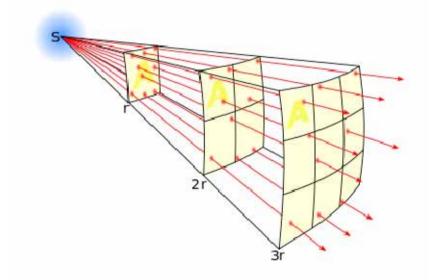


Flux

$$F_{\nu} = \int I_{\nu} \cos \theta_{\nu} d\Omega = \pi I_{\nu} \left(\frac{R_{*}}{r}\right)^{2}$$

 $\theta_{\rm M}$ が望遠鏡の角分解能(angular resolution)より小さい時は点源。Fluxしかわからない。

$$1' = 1^{\circ} / 60, \ 1'' = 1' / 60$$



Intensityは "光線"、Fluxは光線の "本数密度"



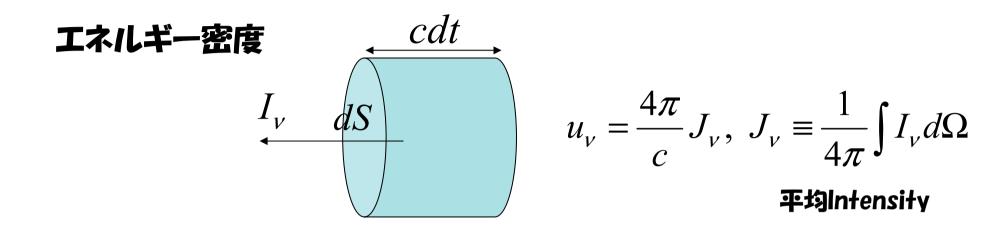
HST



VLA 0.05"

Chandra 0.5"

エネルギー密度・ガス中の光子



Intensityは真空中では一定。

Intensityに影響を与える因子

- ·放射(光子生成)
- ·吸収(光子消滅)
- ・散乱(方向の変化)

輻射輸送方程式

光子に対するボルツマン方程式

$$\frac{dI_{v}}{dx} = j_{v} - n\sigma_{\text{abs},v}I_{v} - n\sigma_{\text{sct},v}I_{v} + n\sigma_{\text{sct},v}J_{v}$$
放射 吸収

数乱(等方散乱近似)

ガス数密度 れ

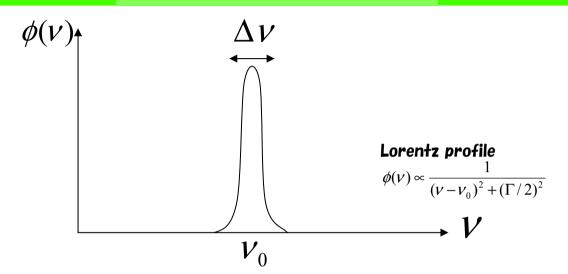
等方放射の時
$$j_{\nu} = \frac{1}{4\pi} \times n \times \frac{dE}{dtd\nu}$$
 emission coefficient

吸収係数
$$\alpha_{\nu} \equiv n\sigma_{\nu,abs}$$
 平均自由行程 $l_{\nu} \equiv \frac{1}{\alpha_{\nu}}$

光学的深さ(optical depth)
$$\tau_v \equiv \int \alpha_v dx$$

source function
$$S_{\nu} \equiv \frac{\dot{J}_{\nu}}{\alpha_{\nu}}$$

Einstein coefficient



line profile function 次元: v^{-1}

有効平均Intensity

$$\overline{J} \equiv \int_0^\infty J_{\nu} \phi(\nu) d\nu$$

状態1-2間の遷移

自発的遷移確率 A_{21}

吸収遷移確率 $B_{12}\overline{J}$

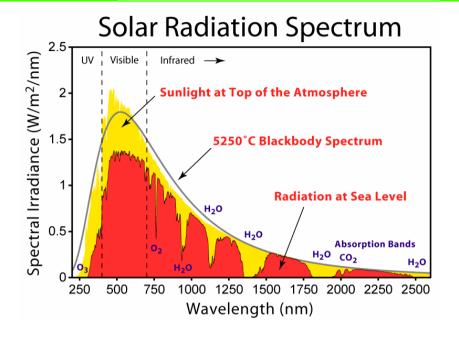
誘導遷移確率 $B_{21}\overline{J}$

Einstein relation

$$g_1B_{12}=g_2B_{21},\; A_{21}=rac{2hv^3}{c^2}B_{21}$$
 g_1 :状態1における統計的自由度

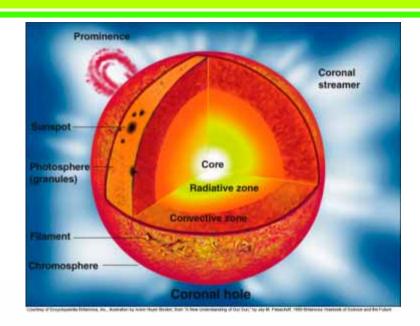
$$j_{\nu} = \frac{h \nu_0}{4\pi} n_2 A_{21} \phi(\nu) \qquad \alpha_{\nu} = \frac{h \nu}{4\pi} \phi(\nu) \left(n_1 B_{12} - n_2 B_{21} \right)$$

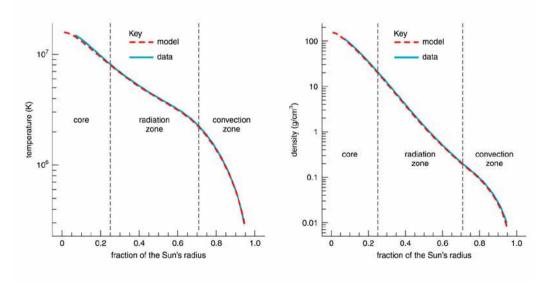
星の構造と輻射輸送



$$\frac{\partial M}{\partial r} = 4\pi r^{2} \rho, \quad \frac{\partial P}{\partial r} = -\frac{GM}{r^{2}} \rho,$$

$$\frac{\partial T}{\partial r} = -\frac{3\alpha_{R}L}{64\pi r^{2}\sigma_{SB}T^{3}}, \quad \frac{\partial L}{\partial r} = 4\pi r^{2}\dot{\varepsilon}_{n}$$





2. 電磁波の基礎理論

- ・電磁場のエネルギー
- Poynting Flux
- ・スペクトラム分解
- ・偏光
- ・ベクトルポテンシャル
- ・ゲージ

古典電磁気学の世界

電磁場の復習

マックスウェル方程式(1864)

ガウスの法則 $\nabla \cdot E = 4\pi \rho_e$ 磁束の保存則 $\nabla \cdot \mathbf{B} = 0$

$$\nabla \cdot \boldsymbol{E} = 4\pi \rho_{\mathrm{e}}$$

-1 (1835) -2 (1861)

ファラデーの法則 $\frac{1}{c}\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E}$

$$\frac{1}{c}\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E}$$

-(3) (1831)

アンペールの法則
$$\frac{1}{c}\frac{\partial E}{\partial t} = \nabla \times B - \frac{4\pi}{c}j$$

-(4) (1826)









電磁波の歴史

1864 マックスウェル方程式

1868 マックスウェルによる電磁波の予言

1879 マイケルソンが光速を測定

1887 マイケルソン・モーリーの実験

1888 ヘルツが電波の発信に成功

1895 レントゲンがX線を発見

1896 ベクレルがヶ線を発見

1900 プランクの光量子仮説

1901 マルコーニが大西洋横断無線通信に成功

1905 アインシュタインの特殊相対性理論

1920 アメリカでラジオ放送開始

1927 ディラックによる雷磁場の量子化

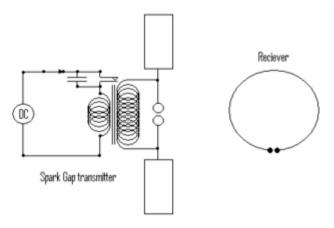
1940 アメリカで電波航法システム、レーダーの実用化

1948 シュウィンガー・朝永・ファインマンの繰り込み

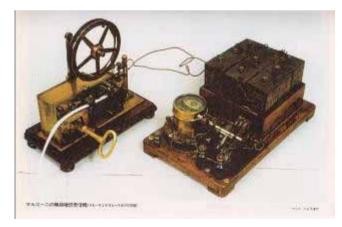
1954 ヤン・ミルズのゲージ場

1960 アメリカでレーザーの発明

1967 ワインバーグ・サラムの電弱統一理論



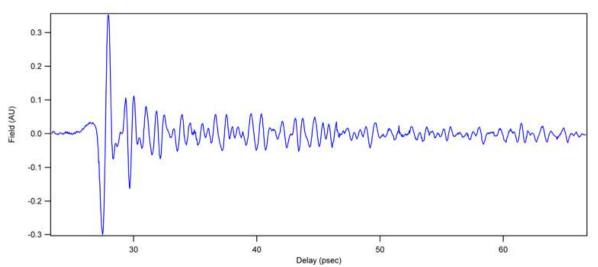
ヘルツの実験のセットアップ



マルコーニの受信機 (彼の発明ではない…)

スペクトルの取得

電場の変動の一例



 X線 (光子)

 電荷

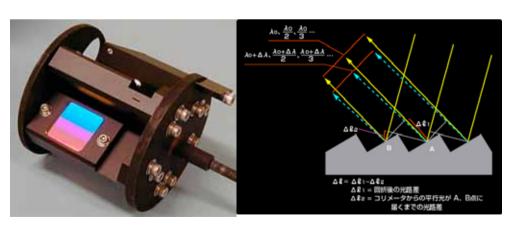
 できる

 ご修化シリコン薄層

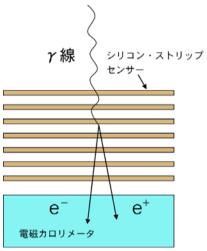
 二酸化シリコン薄層

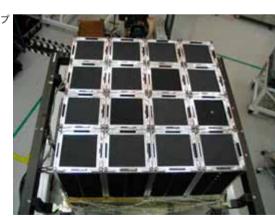
 シリコン導電ゲート

X線はCCDで光子一個一個のエネルギーを直接測れる。



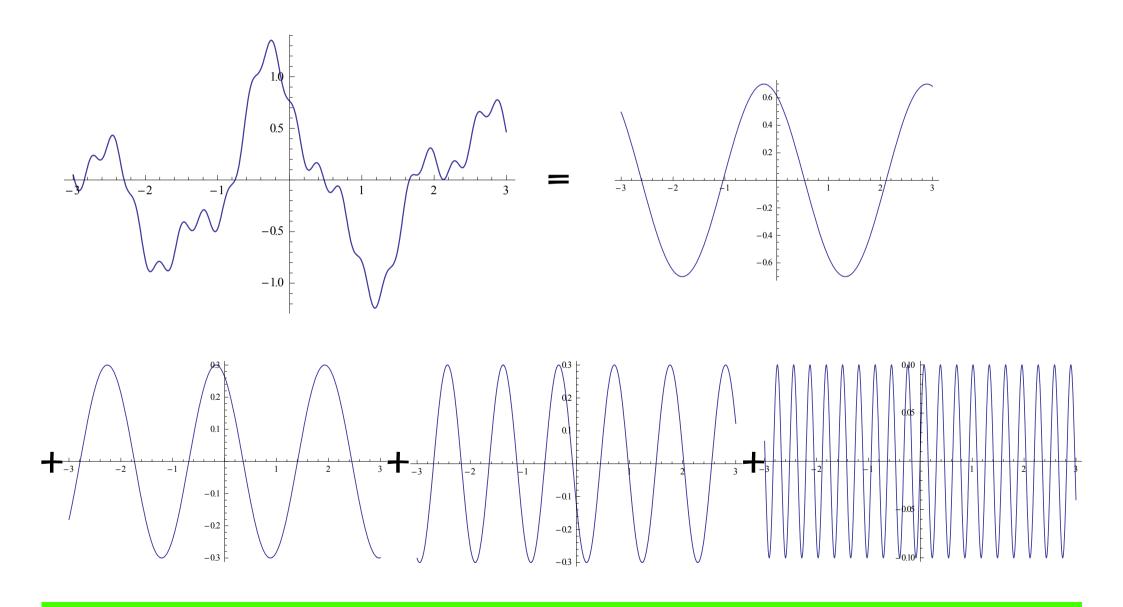




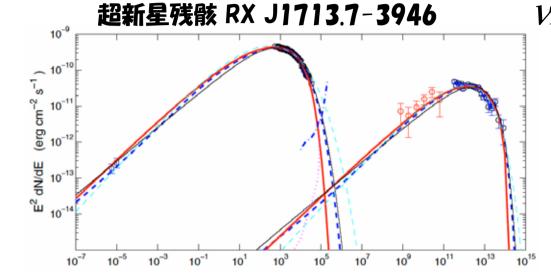


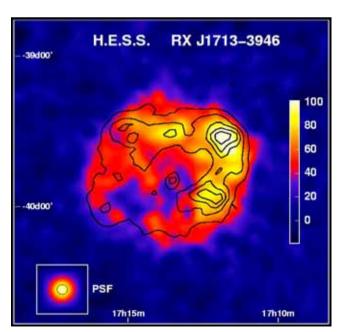
γ線は電子・陽電子のエネルギーを積算する。

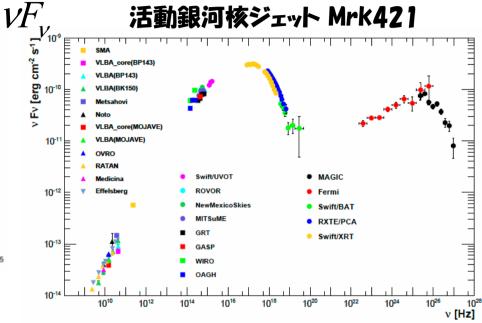
フーリエ分解



高エネルギー天体のスペクトル



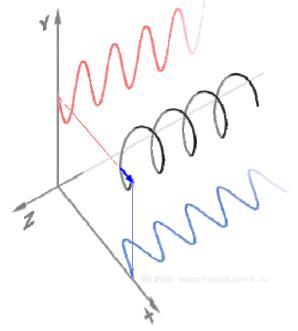






想像図

偏光











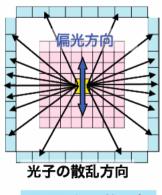


望遠鏡性能の指標

- · 測光:感度·限界等級
- 撮像:角度分解能
- · 分光:波長分解能、帯域
- · 時間分解能(変動天体)
- ・視野
- · 指向速度(突発天体)
- 偏光

コンプトン散乱角の 偏光方向依存性を利用した、

硬X線偏光検出



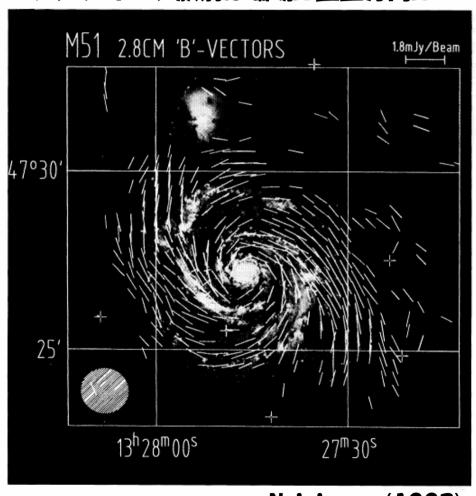
Csl(Tl) シンチレータ

プラスチックシンチレータ

偏光観測

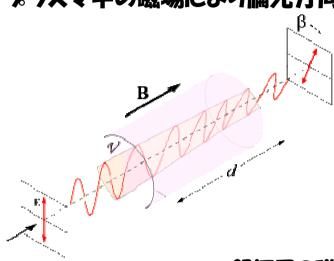
銀河磁場

シンクロトロン放射は磁場に垂直方向に

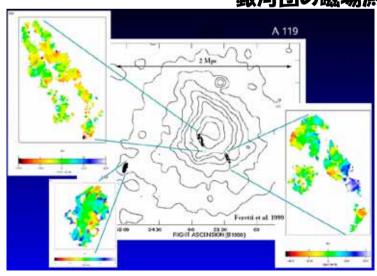


Neininger (1992)

ファラデー回転 プラズマ中の磁場により偏光方向が回転

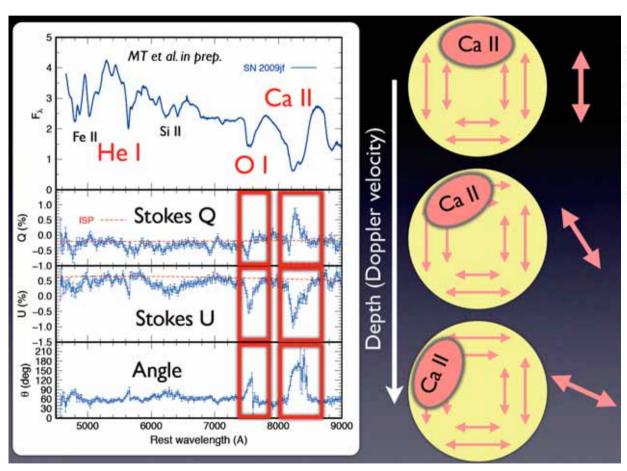


銀河団の磁場測定



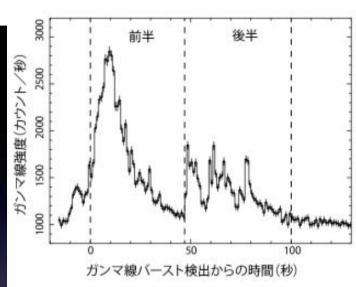
高エネルギー天体

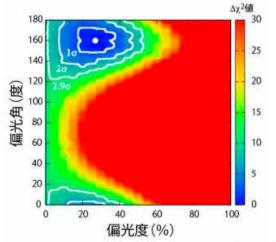
超新星爆発



⑤ 田中雅臣氏

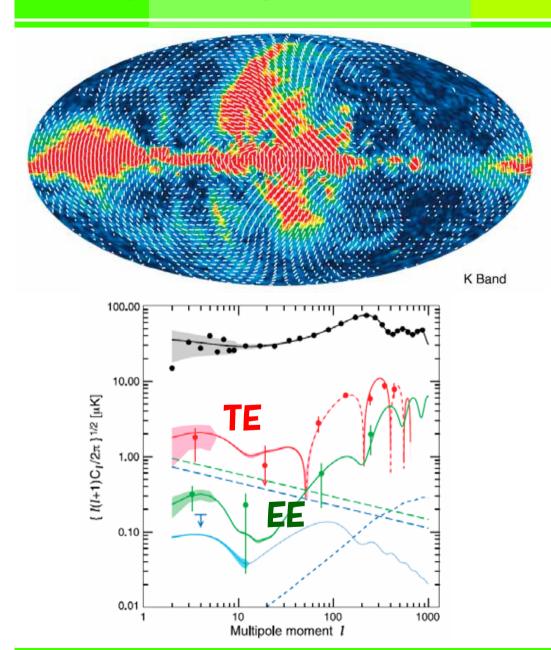
ガンマ線バースト

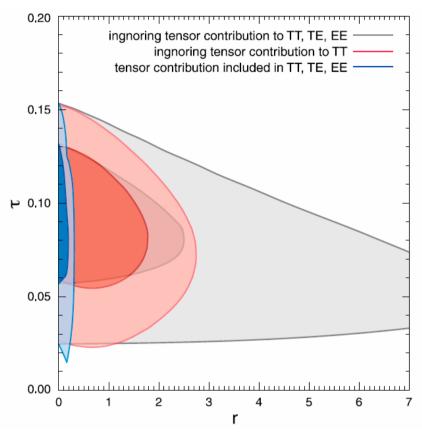




② 米徳氏

CMB偏光観測





宇宙の再イオン化、インフレーションのモデルに制限

ベクトルポテンシャル

$$A^{\mu} = (\phi, A)$$

$$\boldsymbol{E} = -\frac{1}{c} \frac{\partial \boldsymbol{A}}{\partial t} - \nabla \phi, \ \boldsymbol{B} = \nabla \times \boldsymbol{A}$$

定義から

$$\frac{1}{c}\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E}$$
 と $\nabla \cdot \mathbf{B} = 0$ は自明。

$$F^{\mu\nu} \equiv \frac{\partial A^{\nu}}{\partial x_{\mu}} - \frac{\partial A^{\mu}}{\partial x_{\nu}}$$
 及び $j^{\mu} = (c\rho_{\rm e}, j)$ として "運動方程式" $\frac{\partial F^{\mu\nu}}{\partial x^{\nu}} = -\frac{4\pi}{c} j^{\mu}$ は

$$\Delta \phi + \frac{1}{c} \nabla \cdot \frac{\partial A}{\partial t} = -4\pi \rho_{e}$$

$$\Delta A - \frac{1}{c^{2}} \frac{\partial^{2} A}{\partial t^{2}} - \nabla \left(\nabla \cdot A + \frac{1}{c} \frac{\partial \phi}{\partial t} \right) = -\frac{4\pi}{c} \mathbf{j}$$

$$\Rightarrow \frac{\nabla \cdot \mathbf{E} = 4\pi \rho_{e}}{\frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} = \nabla \times \mathbf{B} - \frac{4\pi}{c} \mathbf{j}}$$

$$\Rightarrow \frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} = \nabla \times \mathbf{B} - \frac{4\pi}{c}$$

ゲージ不変性

Dirac方程式

$$(i\hbar c \gamma^{\mu} \partial_{\mu} - mc^{2}) \psi = e \gamma^{\mu} A_{\mu} \psi$$

相互作用項:ゲージ対称性から自動的に決まる

ゲージ変換

$$\psi \to \psi' = \exp\left(-i\frac{e}{\hbar c}\chi(x^{\mu})\right)\psi, A^{\mu} \to A'^{\mu} = A^{\mu} + \partial^{\mu}\chi(x^{\mu})$$
 に対して不変

電弱相互作用:SU(2)にこれを拡張

強い相互作用:SU(3)に拡張

重力場

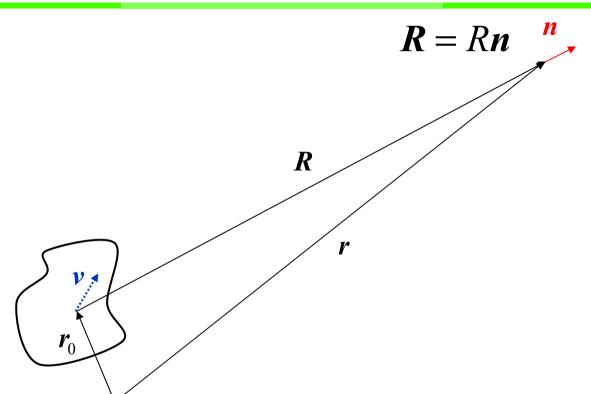
$$x^{\mu} \to x'^{\mu} = x^{\mu} + \xi^{\mu}, \ g^{\mu\nu} \to g'^{\mu\nu} = g^{\mu\nu} + g^{\mu\sigma}\xi^{\nu}_{,\sigma} + g^{\lambda\nu}\xi^{\mu}_{,\lambda} - \xi^{\lambda}g^{\mu\nu}_{,\lambda}$$

3. 荷電粒子からの放射

- ・ Lienard-Wiechartポテンシャル
- ・双極近似に基づく放射
- ・トムソン散乱
 - 断面積
 - 偏光

波動光学の世界

遅延ポテンシャル



時刻化まけるでの電磁場は、

時刻
$$t-\frac{R}{c}$$
 における r_0 での

電荷の運動で決まる。

$$t_{\rm ret} \equiv t - \frac{R}{c}$$
 ELT

$$\phi(\mathbf{r},t) = \frac{q}{R(t_{ret}) - \frac{\mathbf{v}(t_{ret}) \cdot \mathbf{R}(t_{ret})}{c}}, \quad \mathbf{A}(\mathbf{r},t) = \frac{q\mathbf{v}(t_{ret})}{c} \frac{c}{R(t_{ret}) - \frac{\mathbf{v}(t_{ret}) \cdot \mathbf{R}(t_{ret})}{c}}$$

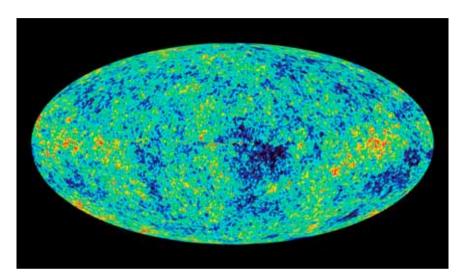
トムソン散乱

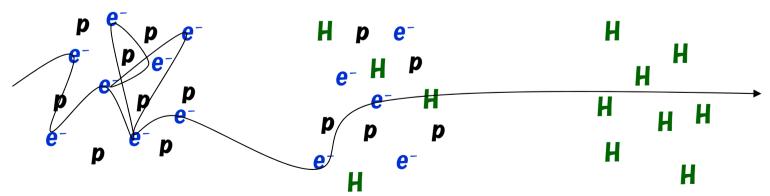


1906 Nobel prize (電子の発見etc)

マイクロ波宇宙背景放射(CMB)

電子への反作用は無視

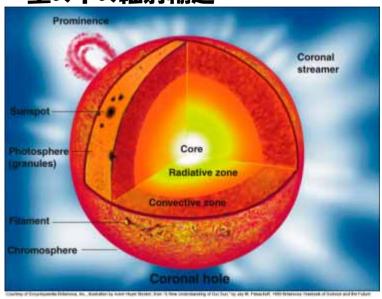




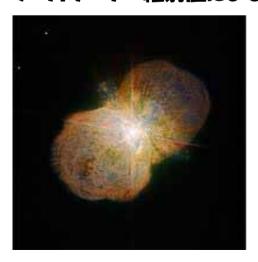
CMB: 電離度が下がり、光が直進できるようになった時の光

トムソン散乱が本質的な現象

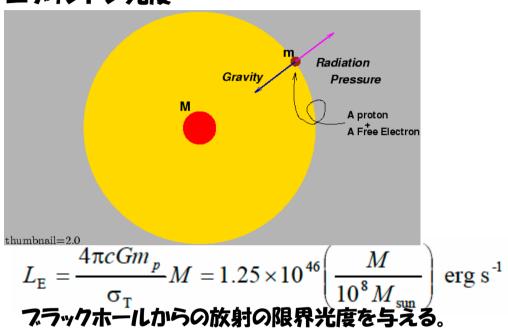
星の中の輻射輸送

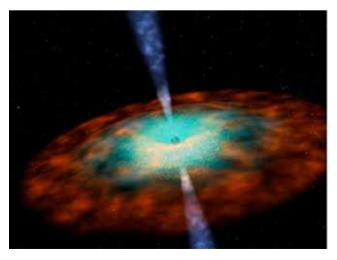


イータ・カリーナ 輻射圧による質量放出



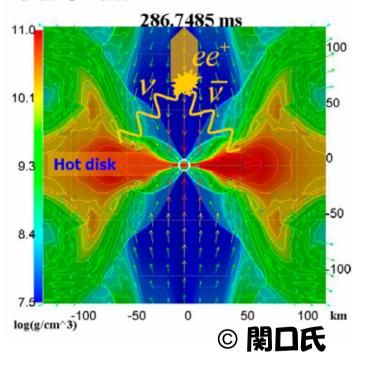
エディントン光度





ガンマ線バースト

Fireball



温度数MeVの電子・陽電子・光子からなる プラズマが形成される。

電子・陽電子の数は熱平衡から決まり、

$$n_{\pm} = \frac{3}{\pi^2} \zeta(3) \left(\frac{T_0}{\hbar c}\right)^3 \simeq 1.0 \times 10^{33} \left(\frac{T_0}{2.8 \text{MeV}}\right)^3 \text{cm}^{-3}$$

トムソン散乱に対する光学的深さは、

$$\tau_{\rm T} = n_{\pm} R_0 \sigma_{\rm T} \simeq 6.9 \times 10^{15} \left(\frac{R_0}{100 {\rm km}}\right) \left(\frac{T_0}{2.8 {\rm MeV}}\right)^3$$



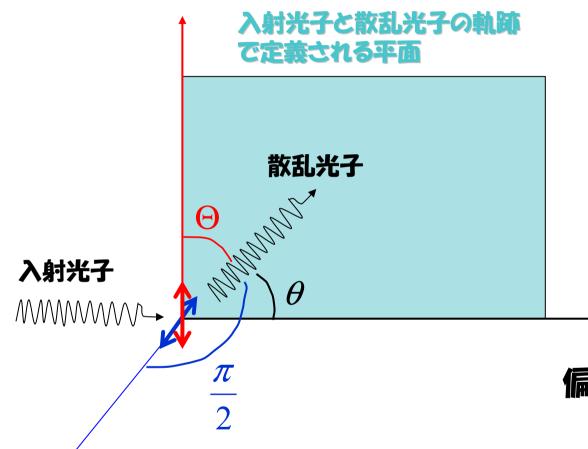
電子・陽電子・光子は一体化し、一流体として振舞う

相対論的ガスの状態方程式 $P=e_{\rm rad}/3$



加速膨張 「∝R

トムソン散乱による偏光



入射光が偏光してなければ、

青い方向に電場が振動する確率と、赤い方向に電場が振動する確率は1:1

$$\frac{d\sigma_{\rm T}}{d\Omega}(\Theta)_{\rm unpol} = \frac{1}{2} \left[\frac{d\sigma_{\rm T}}{d\Omega}(\Theta) + \frac{d\sigma_{\rm T}}{d\Omega} \left(\frac{\pi}{2} \right) \right]_{\rm pol}$$
$$= \frac{1}{2} r_{\rm e}^2 \left(\sin^2 \Theta + 1 \right) = \frac{1}{2} r_{\rm e}^2 \left(1 + \cos^2 \theta \right)$$

青方向の偏光光子Intensityが最大で、 I_{max}とすると、最小になる赤方向の IntensityはI_{min}/I_{max}=cos² 8 となる。

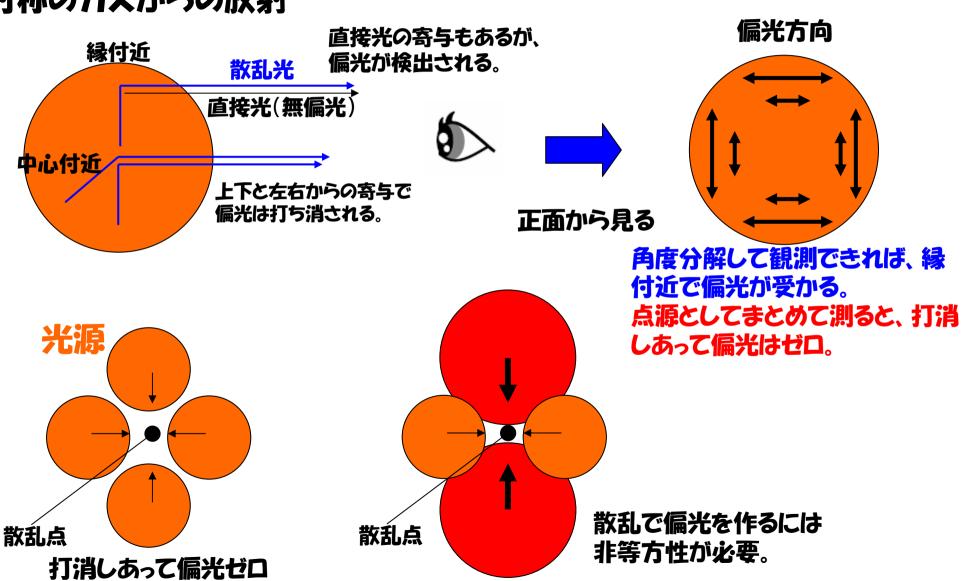
偏光度

$$\Pi = \frac{I_{\text{max}} - I_{\text{min}}}{I_{\text{max}} + I_{\text{min}}} = \frac{1 - \cos^2 \theta}{1 + \cos^2 \theta}$$

 $\theta = \frac{\pi}{2}$ から測ると偏光度は100%

トムソン散乱による偏光

球対称のガスからの放射



4. 放射に対する相対論的効果

- ・ローレンツ変換
- ・ローレンツ収縮・時間の遅れ
- ・相対論的ビーミング
- ・相対論的粒子からの放射
- ・光子の放出時間と観測時間の違い
- ・その他重要な変換

特殊相対論の復習

相対論的ビーミング

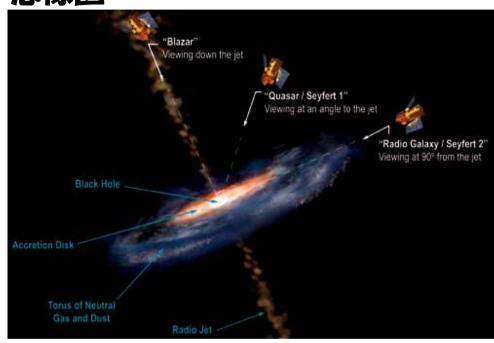
銀河中心BHからの相対論的ジェット



ローレンツ因子

$$\Gamma = \frac{1}{\sqrt{1 - (v/c)^2}} \approx 10$$

想像図

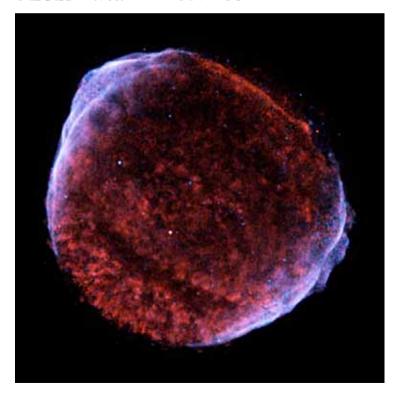


Q.なぜ反対側のジェットは見えないか? A.相対論的ビーミング

超相対論的エネルギーの粒子

太陽の表面温度 ~1eV << m_ec² 非相対論的

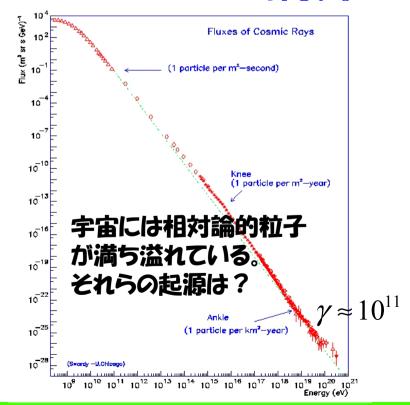
西暦1006年に爆発した 超新星残骸のX線画像



X線のエネルギー ~ keV Q. 電子のエネルギーも同程度? A. ×

典型的には $TeV >> m_e c^2$ ローレンツ因子 $\gamma \approx 10^6$

放射に対して相対論的 効果を考慮しなくてはい けない。



"ベクトル"量の例

座標
$$dx^{\mu} = (cdt, dx)$$

電磁場ポテンシャル

$$A^{\mu} = (\phi, A)$$

電流
$$j^{\mu} = (\rho_{\rm e}c, \boldsymbol{j})$$

波数

$$k^{\mu} = \left(\frac{\omega}{c}, \mathbf{k}\right)$$

四元速度
$$u^{\mu} = (\gamma c, \gamma v)$$

運動量

$$k^{\mu} = \left(\frac{\omega}{c}, \mathbf{k}\right)$$
$$p^{\mu} = mu^{\mu} = \left(\frac{E}{c}, \mathbf{p}\right)$$

微分
$$\partial^{\mu} = \frac{\partial}{\partial x_{\mu}} = \left(\frac{1}{c} \frac{\partial}{\partial t}, -\nabla\right)$$

平坦な時空では

$$A^{\mu} = (A^0, A)$$

$$A^{\mu}=(A^{0},A)$$
 に対し $A_{\mu}=(A^{0},-A)$

ミュー粒子の観測

宇宙線+大気原子核→π、γ線、電子・陽電子 Pierre Auger Observatory

$$\pi^+ \to \mu^+ + \nu_\mu$$



ミューオン Flux~100 m-2 s-1

質量~100MeV(電子~500keV) 静止系での寿命~2×10-6 s

$$\mu^{+} \to e^{+} + \bar{\nu}_{\mu} + \nu_{e}$$

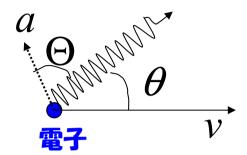




相対論的電子からの放射

電子のローレンツ因子

$$\gamma = \frac{1}{\sqrt{1 - (v/c)^2}}, \ \beta = \frac{v}{c}, \ \delta = \frac{1}{\gamma(1 - \beta\mu)}$$



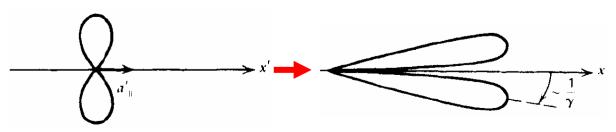
観測時間間隔
$$dt_{obs} = (1 - \beta \mu)dt = \gamma(1 - \beta \mu)dt'$$

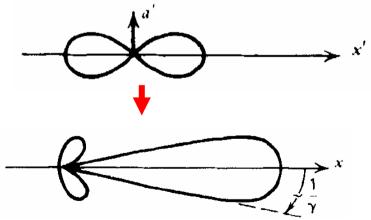
総エネルギー放射率

$$\frac{dE}{dt} = \frac{dE'}{dt'} = \frac{2e^2}{3c^3}a'^2 = \frac{2e^2}{3c^3}\gamma^4(a_{\perp}^2 + \gamma^2 a_{||}^2)$$

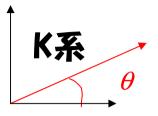
角度分布

$$\frac{dE}{dt_{\text{obs}}d\Omega} = \frac{1}{(1-\beta\mu)} \frac{dE}{dtd\Omega} = \delta^4 \frac{dE'}{dt'd\Omega'}$$
$$= \frac{e^2}{4\pi c^3} \frac{a_\perp^2 + \gamma^2 a_{//}^2}{(1-\beta\mu)^4} \sin^2 \Theta'$$





重要な関係



$$\Gamma = \frac{1}{\sqrt{1 - (V/c)^2}}, \ \beta = \frac{V}{c}, \ \delta = \frac{1}{\Gamma(1 - \beta\mu)}$$

ローレンツ収縮
$$L_{//}=rac{L_{//}^{\prime}}{\Gamma}$$

速度
$$v_{//} = \frac{v_{//}' + V}{1 + \frac{Vv_{//}'}{c^2}}, \ v_{\perp} = \frac{v_{\perp}'}{\Gamma\left(1 + \frac{Vv_{//}'}{c^2}\right)}$$

振動数
$$v = \Gamma(1 + \beta \mu')v' = \delta v'$$

密度
$$n = \Gamma n'$$

運動量空間
$$\frac{d^3p}{E} = \frac{d^3p'}{E'}$$

Intensity
$$I_{\nu} = \left(\frac{\nu}{\nu'}\right)^3 I'_{\nu'}$$

時間の拡張 $dt = \Gamma dt'$

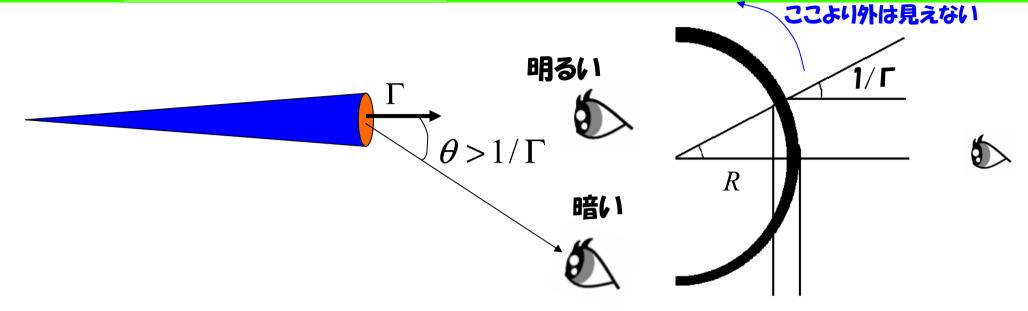
光線の角度
$$\mu = \frac{\mu' + \beta}{1 + \beta \mu'}, \quad d\Omega = \frac{d\Omega'}{\Gamma^2 (1 + \beta \mu')^2}$$

分布関数
$$f = f'$$

エネルギー密度
$$e = \Gamma^2 (e' + \beta^2 P')$$

Emissivity
$$j_{\nu} = \Gamma^2 (1 + \beta \mu')^2 j'_{\nu'} = \left(\frac{\nu}{\nu'}\right)^2 j'_{\nu'}$$

相対論的ジェット



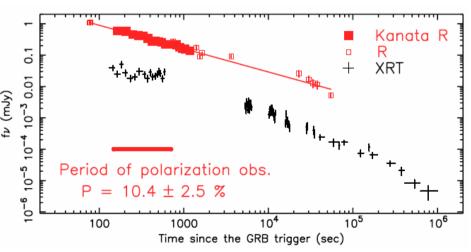
ジェットの偏光

 $\theta \sim 1/\Gamma$

ビーミングのおかげで、ジェットの一部だけしか見えないかも。

仮に縁を見ていれば、偏光が 受かる。

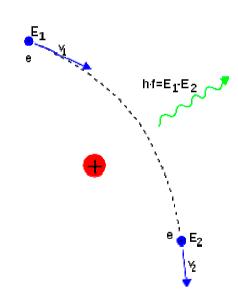
γ線バーストの残光光度曲線と偏光



Uehara+ 2012

5. 制動放射

- ・一回散乱に伴う放射
- · Gaunt因子
- 熱的制動放射
- 相対論的制動放射
- ・自由自由吸収



イオンと電子の散乱による放射

制動放射:銀河団からのX線

銀河団 Abell 1689

青:X線(ガス)

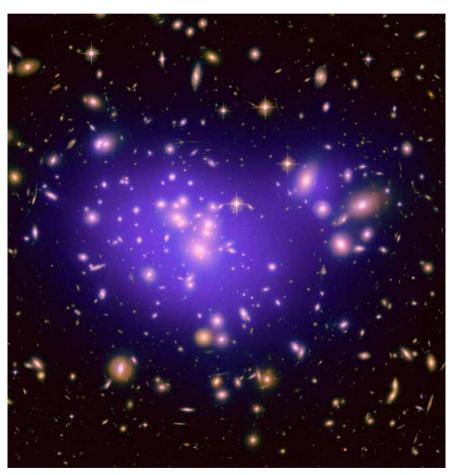
暗黑物質:85%

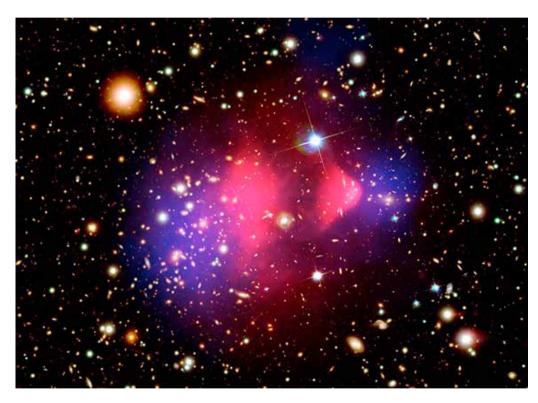
ガス:13%

星:2%

1E 0657-56 (Bullet Cluster)

赤:ガス、青:暗黒物質



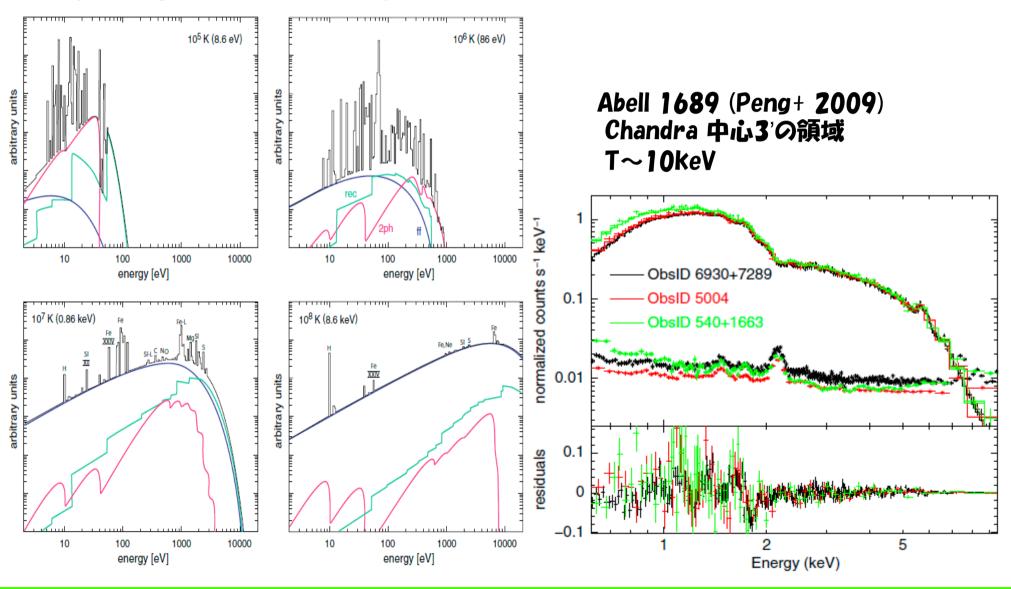


重力によるガスの降着→衝撃波→高温プラズマ

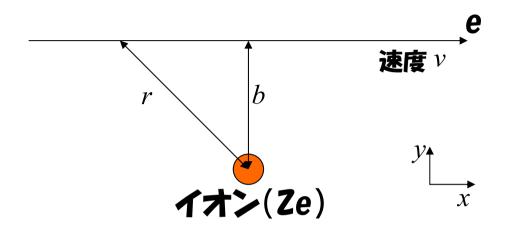
超新星残骸などでも

銀河団スペクトル

モデル(Böhringer & Werner 2010)



一回散乱に伴う放射



$$E_{\rm rad}(t) = \frac{\left| \ddot{\boldsymbol{d}} \right|}{c^2 R} \sin \Theta$$

$$\hat{E}(\omega) = \frac{\hat{d}(\omega)}{c^2 R} \sin \Theta$$

$$\frac{dE}{dAd\omega}\Big|_{ss} = c\Big|\hat{E}(\omega)\Big|^2 = \frac{Z^2e^6}{\pi^2c^3R^2m_e^2b^2v^2}\sin^2\Theta \quad \text{for } \omega << \frac{v}{b}$$

$$\frac{dE}{d\omega}\Big|_{ss} = \frac{8Z^2e^6}{3\pi c^3 m_e^2 b^2 v^2} \quad \text{for } \omega << \frac{v}{b}$$

$$\frac{db}{b}$$

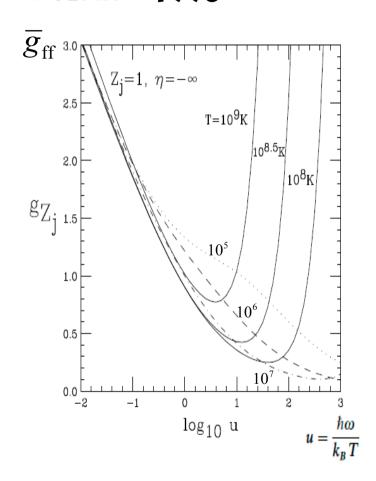
$$\frac{dc}{d\omega}\Big|_{ss} = \frac{8Z^2e^6}{3\pi c^3 m_e^2 b^2 v^2} \quad \text{for } \omega << \frac{v}{b}$$

量子論に基づいた計算

ボルン近似

$$\begin{split} \frac{\mathrm{d}^2 \sigma^*}{\mathrm{d} k^* \mathrm{d} \Omega^*} &= \frac{\alpha r_0^2}{2\pi} \frac{p_2^*}{p^2 k} (\epsilon - p \cos \theta) \\ &\times \left\{ \frac{1}{p} \left[\epsilon^2 + \frac{\epsilon}{\epsilon - p \cos \theta} - 2(2\epsilon^2 + 1) \cos^2 \theta \right] \right. \\ &+ k(p - \epsilon \cos \theta) + \frac{p^2}{p_2^{*2} + 2k} \left[k(p - \epsilon \cos \theta) - p \right] \\ &- \frac{2p \ln(\epsilon_2^* + p_2^*)}{p_2^* (\epsilon - p \cos \theta)} + \frac{p}{p_2^*} \frac{p}{\sqrt{p_2^{*2} + 2k}} \ln \frac{\sqrt{p_2^{*2} + 2k} + p_2^*}{\sqrt{p_2^{*2} + 2k} - p_2^*} \\ &\times \left[1 - 2k + \frac{k^2}{p_2^{*2} + 2k} \left\{ k(\epsilon - p \cos \theta)^2 + p(\epsilon \cos \theta - p) \right\} \right] \\ &+ \frac{1}{p_2^*} \ln \frac{p(p + p_2^*) - \epsilon k(\epsilon - p \cos \theta)}{k(\epsilon - p \cos \theta)} \\ &\times \left[2\epsilon \sin^2 \theta \left\{ k(\epsilon - p \cos \theta)(3/p^2 + 1) - \epsilon \right\} \right. \\ &+ (2\epsilon^2 - 1)(1 + k/p^2) + 2 \left\{ \epsilon - k(\epsilon - p \cos \theta) \right\}^2 \\ &- (k/p^2)(\epsilon - p \cos \theta)(5\epsilon + pk \cos \theta) \right] \right\}, \end{split}$$

Gaunt因子 Nozawa+ 1998



Haug 2003

熱的制動放射

$$\frac{dE}{dtdVdV} = n_{\rm e}n_{\rm i}Z^2 \frac{2^5 \pi e^6}{3m_{\rm e}c^3} \left(\frac{2\pi}{3m_{\rm e}T}\right)^{\frac{1}{2}} \exp\left[-\frac{\varepsilon}{T}\right] \overline{g}_{\rm ff}$$

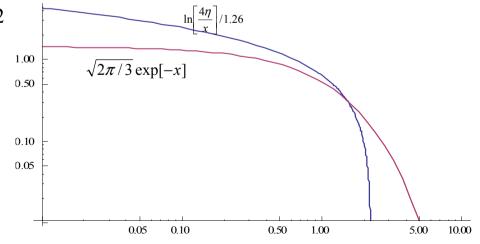
$$\approx 2.0 \times 10^{-41} Z^2 n_e n_i \left(\frac{T}{1 \text{keV}}\right)^{-\frac{1}{2}} \exp \left[-\frac{\varepsilon}{T}\right] \overline{g}_{\text{ff}} \text{ erg cm}^{-3} \text{ s}^{-1} \text{ Hz}^{-1}$$
 光子のベキ指数: -1 (スランク分布:1)

Svensson 1984

$$\frac{dE}{dtdVdV} = n_{\rm e}n_{\rm p} \frac{2^5\pi e^6}{3m_{\rm e}^2c^4} \ln\left[4\eta(1+C_1\theta)\frac{T}{\varepsilon}\right] \frac{\left(1+2\theta+2\theta^2\right)}{\exp\left(\frac{1}{\theta}\right)K_2\left(\frac{1}{\theta}\right)}$$

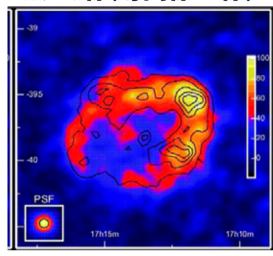
$$\theta = \frac{T}{m_{\rm e}c^2}, C_1 = \frac{\eta}{2} \exp\left(\frac{5}{2}\right) \approx 3.42, \ \eta = \exp(-\gamma_{\rm E}), \ \gamma_{\rm E} \approx 0.5772$$

$$\exp\left(\frac{1}{\theta}\right) K_2\left(\frac{1}{\theta}\right) \approx 1.26\sqrt{\theta} \text{ for } \theta << 1$$



超新星残骸 RX J1713.7-3946

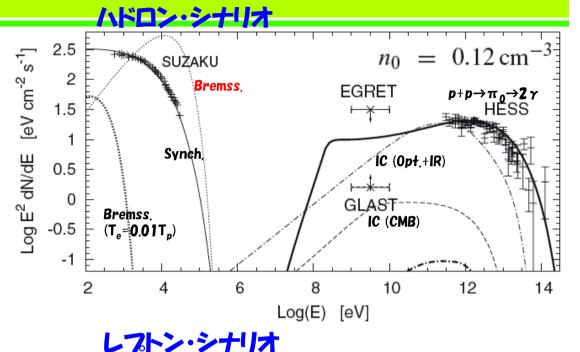
ガンマ線(等高線:X線)

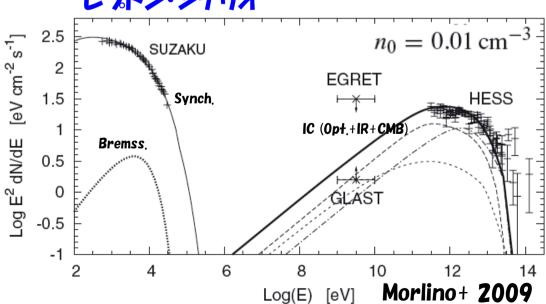


Aharonian + 2007

高エネルギー陽子とガスの衝突からパイ中間子を作り、ガンマ線を説明する場合、高いガス密度を要求。

高いガス密度は、熱的X線放射を予言し、 モデルに制限を与える。





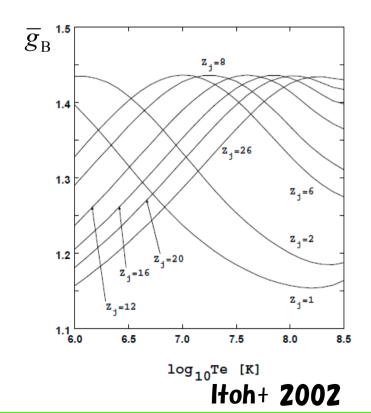
冷却率(放射パワー)

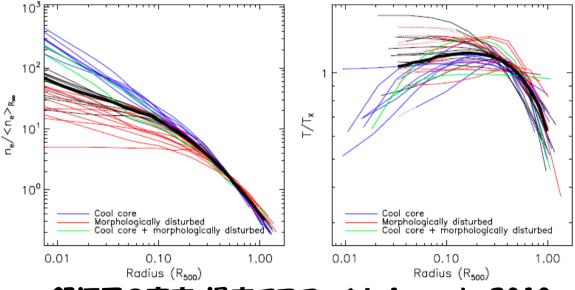
$$\frac{dE}{dtdV} = n_{\rm e} n_{\rm i} Z^2 \frac{2^5 \pi e^6}{3h m_{\rm e} c^3} \left(\frac{2\pi T}{3m_{\rm e}}\right)^{\frac{1}{2}} \overline{g}_{\rm B}$$

$$\approx 4.9 \times 10^{-24} Z^2 n_e n_i \left(\frac{T}{1 \text{keV}}\right)^{\frac{1}{2}} \overline{g}_B \text{ erg cm}^{-3} \text{ s}^{-1}$$

ガスの冷却時間スケール

$$t_{\text{cool}} = \frac{\frac{3}{2} n_{\text{e}} T}{\frac{dE}{dt dV}} \propto n_{\text{e}}^{-1} T^{\frac{3}{2}}$$





銀河団の密度・温度プロファイル Arnaud+ 2010 ガスの圧力分布から質量を見積もれる。 中心部を加熱する機構が必要。未解明。

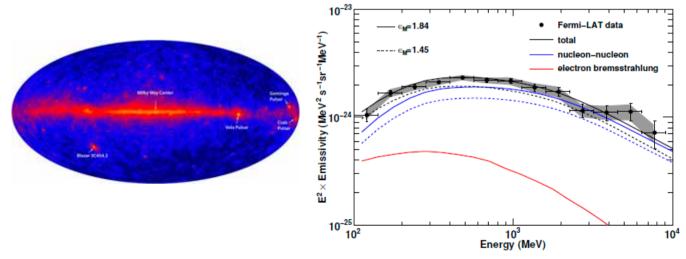
相対論的ガスの場合

熱的放射

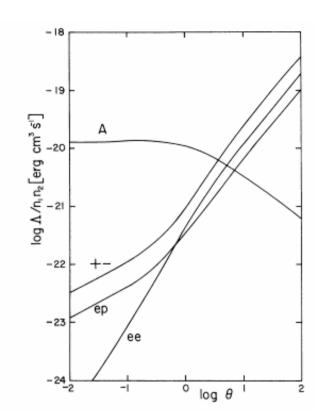
$$\frac{dE}{dtdV} = n_{\rm e} n_{\rm p} \frac{2^5 e^6}{3h m_{\rm e} c^3} \left(\frac{2T}{\pi m_{\rm e}}\right)^{\frac{1}{2}} \left(1 + 1.781\theta^{1.34}\right) \text{ for } \frac{1}{137^2} << \theta \le 1$$

$$= n_{\rm e} n_{\rm p} \frac{12e^6}{h m_{\rm e}^2 c^4} T \left(\ln(2\eta\theta + 0.42) + \frac{3}{2}\right) \text{ for } \theta \ge 1$$
Svensson 1982

非熱的放射



銀河面の拡散ガンマ線 Abdo+ 2009



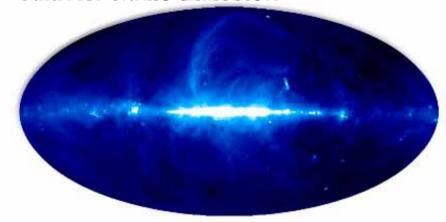
$$E \propto n \times \left[\left(n - \frac{v}{c} \right) \times \dot{v} \right]$$

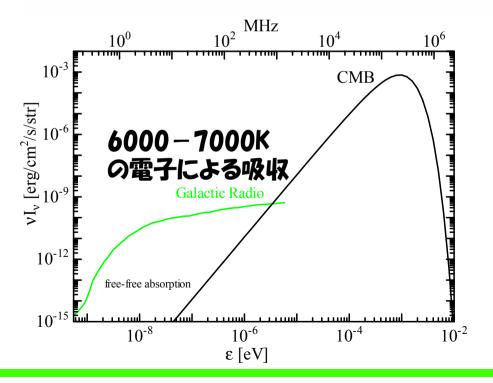
双極近似では無視した項

双極子の寄与がゼロでも、 相対論的になると放射が放 たれる。

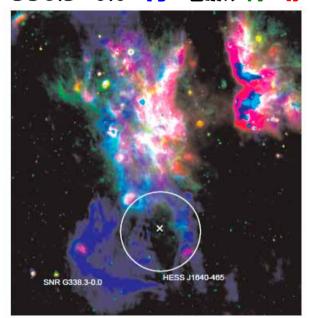
自由自由吸収

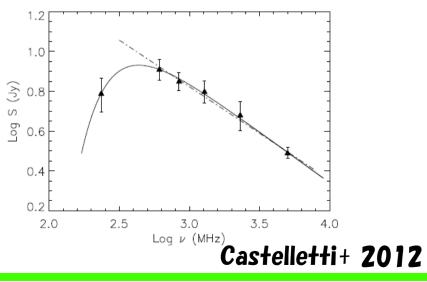






SNR 338.3-0.0 青:電波、緑·赤:赤外





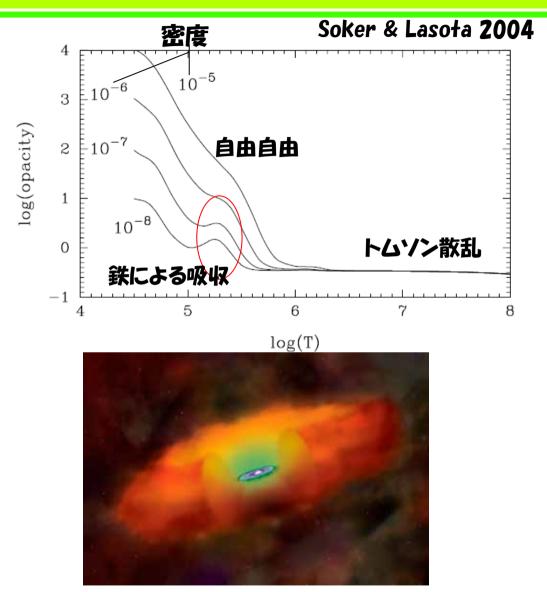
自由自由吸収に対するRosseland平均吸収係数

$$\alpha_{\rm R} \equiv \frac{\int \frac{\partial B_{\nu}}{\partial T} d\nu}{\int \frac{1}{\alpha_{\nu}} \frac{\partial B_{\nu}}{\partial T} d\nu} \propto T^{-\frac{7}{2}} n_{\rm e} n_{\rm i}$$

Rosseland近似

$$\frac{dE}{dtdA} = -\frac{16\sigma_{\rm SB}}{3\alpha_{\rm R}}T^3\frac{\partial T}{\partial r}$$

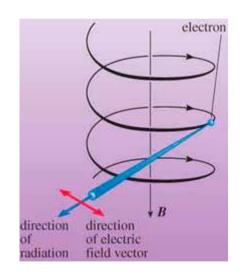
吸収が弱いと温度勾配も弱い。温度が低いと自由自由が効いてくる。



降着円盤でも同じ技法が用いられている。 BHに吸い込まれる前に、輻射は脱出できるか?

6. シンクロトロン放射

- ・磁場の中の電子の運動
- ・エネルギー放射率
- ・典型的な振動数
- ・シンクロトロン関数
- ・非熱的な電子集団からの放射
- ・シンクロトロン自己吸収

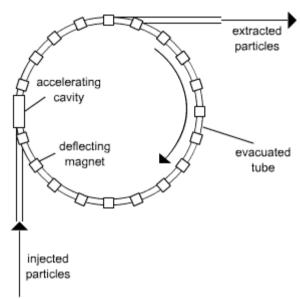


磁場による電子加速に伴う放射

シンクロトロン

SPring-8



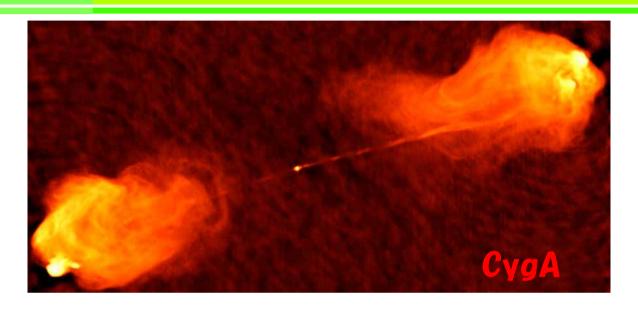


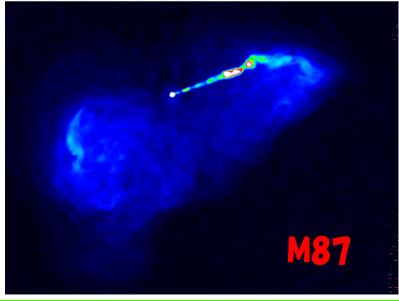


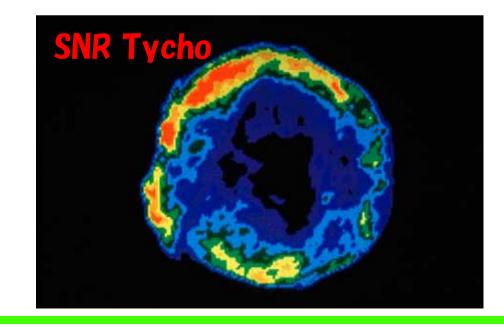
LHC (陽子加速器 半径4.3km)

シンクロトロン(電波)

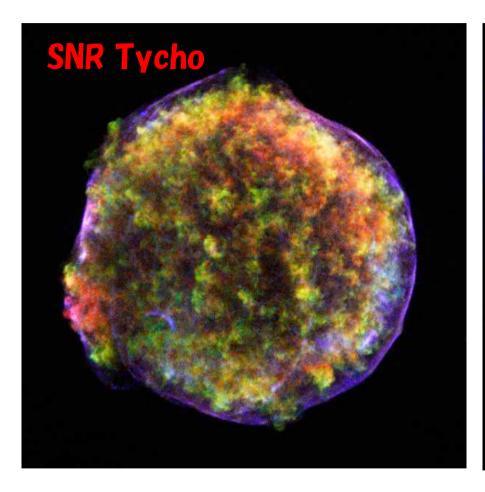


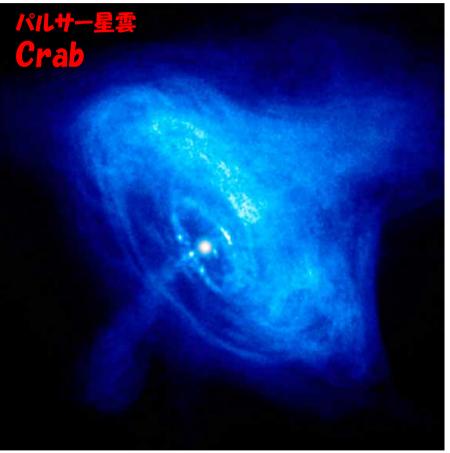






シンクロトロン(X線)





Tycho's SNRの時代

1572年、Tycho Brahe(デンマーク) その頃の世界は によって発見(肉眼)された超新星

英国:チューダー朝の絶対王政絶頂期

仏国:ヴァロア朝の元統一 独国:プロイセン、ザクセン、

バイエルンなどに分割

ルネサンスからバロックへの移行期

ローマ教皇:グレゴリウス13世





中国:明朝 日本は?



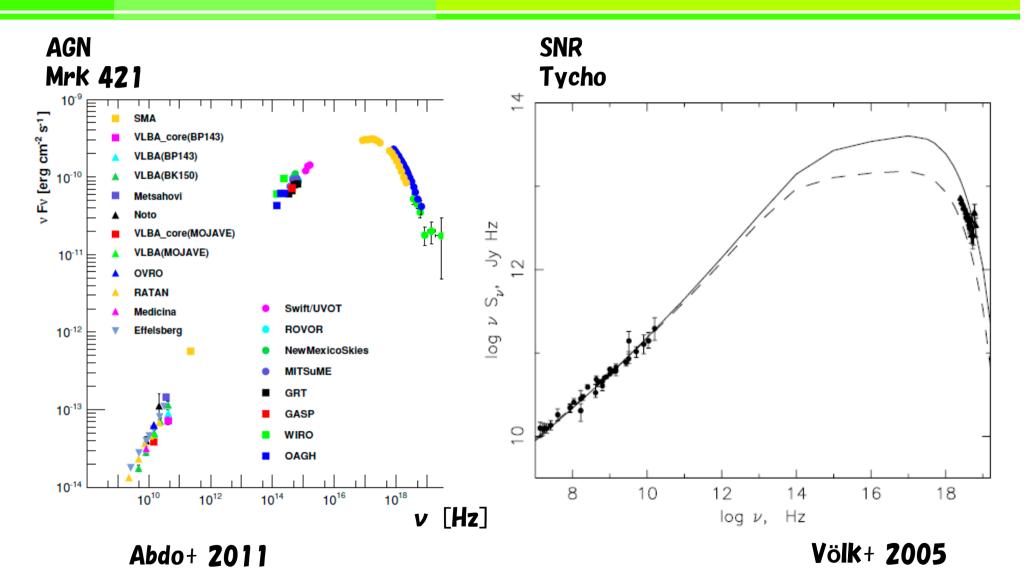
エリザベス一世



万暦赤絵

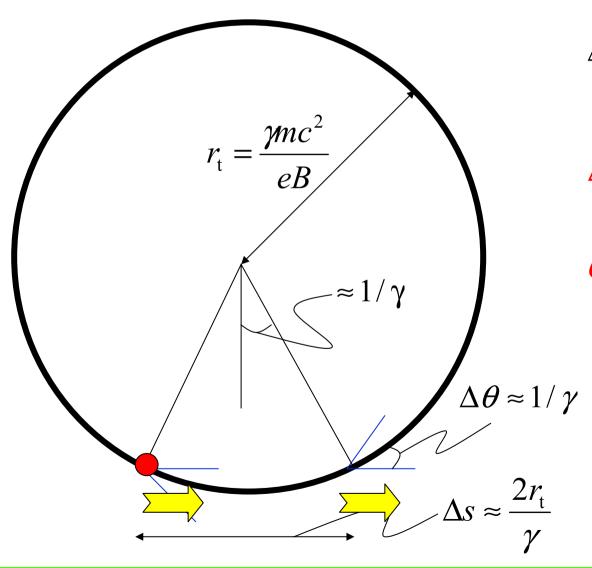
その他の歴史的SNR: RCW 86(185年、後漢書)、SN 1006(宋史、安倍吉昌、アリ・イブン・ルドワン、 ザンクト・ガレン修道院)、Crab(1054年、宋史など)、Kepler(1604年)、1987A(KamioKande II)

シンクロトロン(スペクトル)



シンクロトロンの典型的振動数

$$\alpha = \pi/2$$
 の時



$$\Delta t = \frac{\Delta s}{c} = \frac{2mc^2}{eB}$$

$$\Delta t_{\rm obs} \approx \Delta t / \gamma^2$$

$$\Delta t_{\rm obs} \approx \Delta t / \gamma^2$$

$$\omega_{\rm c} = \frac{3\gamma^2 eB}{2mc}$$



シンクロトロンのピーク

$$\varepsilon_{\text{max}} = \delta \frac{3\hbar eB'}{2m_{\text{e}}c} \gamma_{\text{max}}^2 = 0.35 \left(\frac{\delta}{20}\right) \left(\frac{B'}{0.1\text{G}}\right) \left(\frac{\gamma_{\text{max}}}{10^5}\right)^2 \text{keV}$$

$$\varepsilon_{\max} L_{\text{iso},\varepsilon_{\max}} = \int d\gamma N_{\text{e}}(\gamma) \delta^4 \frac{dE'}{dt' d\varepsilon'_{\max}} \varepsilon'_{\max} \approx \delta^4 N_{\text{e}}(\gamma_{\max}) \Delta \gamma \frac{dE'}{dt'}(\gamma_{\max})$$

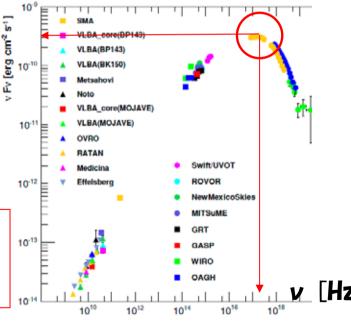
$$\approx \delta^4 N_{\rm e} (\gamma_{\rm max}) \Delta \gamma \frac{4e^4 B^{\prime 2}}{9m_{\rm e}^2 c^3} \gamma_{\rm max}^2$$
時間変動スケール

$$N_{\rm e}(\gamma_{\rm max})\Delta\gamma pprox rac{t_{
m var}L_{
m e,max}}{\delta\gamma_{
m max}m_{
m e}c^2}$$
 アー $\gamma_{
m max}$ の電子が担うエネルギー放出率 $\gamma_{
m max}$ の電子が担うエネルギー放出率

$$\varepsilon_{\text{max}} L_{\text{iso}, \varepsilon_{\text{max}}} \approx \delta^3 t_{\text{var}} L_{\text{e,max}} \frac{4e^4 B^{12}}{9m_{\text{e}}^3 c^5} \gamma_{\text{max}}$$

$$= 10^{44} \left(\frac{\delta}{20}\right)^{3} \left(\frac{t_{\text{var}}}{10^{4} \text{s}}\right) \left(\frac{L_{\text{e,max}}}{10^{42} \text{erg s}^{-1}}\right) \left(\frac{B'}{0.1 \text{G}}\right) \left(\frac{\gamma_{\text{max}}}{10^{5}}\right)^{2} \text{erg s}^{-1}$$

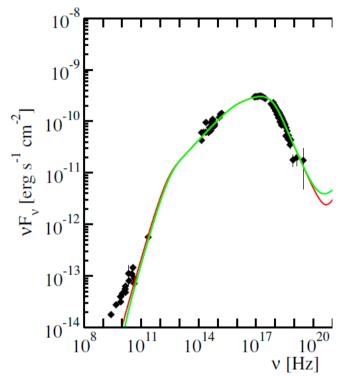
AGN Mrk 421



球対称相当の光度なので、見かけ上電子のエネルギー放出率(実際の値)を上回っている。

AGNとSNRの場合

AGN Mrk 421(Abdo+ 2011)



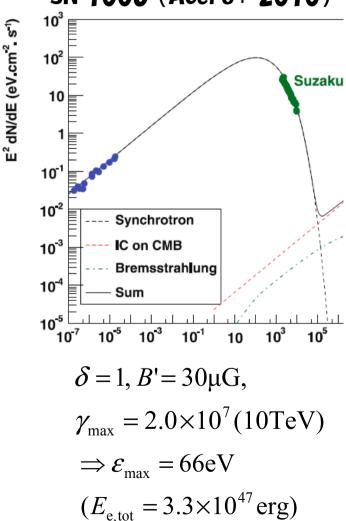
$$\delta = 21, t_{\text{var}} = 8.64 \times 10^{4} \text{ s}, B' = 0.038 \text{G},$$

$$\gamma_{\text{max}} = 3.9 \times 10^{5}, L_{\text{e,max}} = 1.3 \times 10^{42} \text{ erg s}^{-1}$$

$$\Rightarrow \varepsilon_{\text{max}} = 2.1 \text{ keV}, \varepsilon_{\text{max}} L_{\text{iso}, \varepsilon_{\text{max}}} = 7 \times 10^{44} \text{ erg s}^{-1}$$

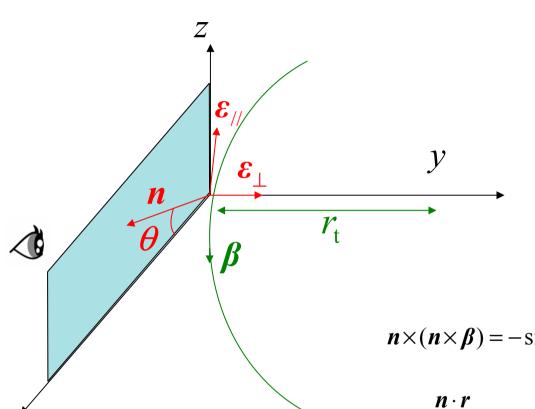
4πD2で割ると、3.3×10⁻¹⁰ erg cm⁻² s⁻¹

SNR SN 1006 (Acero+ 2010)



問題設定

 χ



$$\mathbf{n} = (\cos \theta, 0, \sin \theta), \ \boldsymbol{\varepsilon}_{\perp} = (0,1,0), \ \boldsymbol{\varepsilon}_{\perp} = \mathbf{n} \times \boldsymbol{\varepsilon}_{\perp}$$

$$\boldsymbol{\beta} = \left(\cos\left(\frac{vt_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}}\right), \sin\left(\frac{vt_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}}\right), 0\right)$$

$$\mathbf{r} = \left(r_{t} \sin\left(\frac{vt_{ret}}{r_{t}}\right), r_{t} - r_{t} \cos\left(\frac{vt_{ret}}{r_{t}}\right), 0\right)$$

$$\mathbf{n} \times (\mathbf{n} \times \boldsymbol{\beta}) = -\sin\left(\frac{vt_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}}\right) \boldsymbol{\varepsilon}_{\perp} + \cos\left(\frac{vt_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}}\right) \sin \boldsymbol{\theta} \boldsymbol{\varepsilon}_{//} \approx -\frac{vt_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}} \boldsymbol{\varepsilon}_{\perp} + \boldsymbol{\theta} \boldsymbol{\varepsilon}_{//}$$

$$t_{\text{ret}} - \frac{\boldsymbol{n} \cdot \boldsymbol{r}}{c} = t_{\text{ret}} - \frac{r_{\text{t}}}{c} \cos \theta \sin \left(\frac{v t_{\text{ret}}}{r_{\text{t}}} \right) \approx \frac{1}{2\gamma^2} \left[(1 + \theta^2 \gamma^2) t_{\text{ret}} + \frac{c^2 \gamma^2 t_{\text{ret}}^3}{3r_{\text{t}}^2} \right]$$

三次微小量

$$\frac{d}{d\omega d\Omega} \begin{pmatrix} E_{\perp} \\ E_{//} \end{pmatrix} = \frac{e^2 \omega^2}{4\pi^2 c} \left| \int dt_{\text{ret}} \begin{pmatrix} ct_{\text{ret}} / r_{\text{t}} \\ \theta \end{pmatrix} \exp \left[\frac{i\omega}{2\gamma^2} \left((1 + \gamma^2 \theta^2) t_{\text{ret}} + \frac{c^2 \gamma^2 t_{\text{ret}}^3}{3r_{\text{t}}^3} \right) \right]^2$$

低振動数の極限

$$\frac{dE_{\perp}}{d\omega d\Omega} \propto \omega^{2} \left| \int dt_{\text{ret}} t_{\text{ret}} \exp \left[\frac{i\omega}{2\gamma^{2}} \left(1 + \gamma^{2}\theta^{2} \right) t_{\text{ret}} + \frac{c^{2}\gamma^{2}t_{\text{ret}}^{3}}{3r_{\text{t}}^{3}} \right) \right|^{2}$$

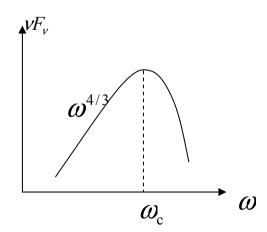
$$\omega \to 0$$
 での典型的時間スケール $\Delta t^{3} \sim \frac{3r_{t}^{3}}{c^{2}\gamma^{2}} \frac{2\gamma^{2}}{\omega} \Rightarrow \Delta t \propto \omega^{-1/3}$

$$\frac{dE_{\perp}}{d\omega d\Omega} \sim \omega^{2} \left| \int dt_{\rm ret} t_{\rm ret} \right|^{2} \sim \omega^{2} \Delta t^{4} \propto \omega^{2/3}$$

$$d\Omega \propto \Delta \theta \propto \Delta t \quad \text{for } \frac{dE_{\perp}}{d\omega} \propto \Delta t \frac{dE_{\perp}}{d\omega d\Omega} \propto \omega^{1/3}$$

光子数分布なら

$$n_{\gamma}(\omega) \propto \frac{1}{\omega} \frac{dE_{\perp}}{d\omega} \propto \omega^{-2/3}$$



時間積分

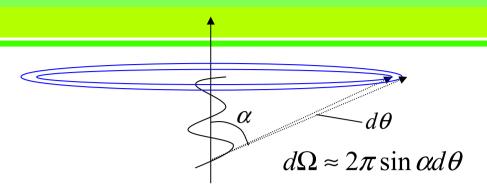
$$\begin{split} &\frac{d}{d\omega d\Omega}\begin{pmatrix} E_{\perp} \\ E_{\parallel} \end{pmatrix} = \frac{e^2\omega^2}{4\pi^2c} \bigg| \int dt_{\rm ret} \begin{pmatrix} ct_{\rm ret} / r_{\rm t} \\ \theta^2 \end{pmatrix} \exp \bigg[\frac{i\omega}{2\gamma^2} \bigg((1+\gamma^2\theta^2) t_{\rm ret} + \frac{c^2\gamma^2 t_{\rm ret}^3}{3r_{\rm t}^3} \bigg) \bigg]^2 \\ &= \frac{e^2\omega^2}{4\pi^2c} \bigg(\frac{r_{\rm t}}{c\gamma^2} \bigg)^2 \bigg| \int d\xi \begin{pmatrix} \xi \\ \gamma\theta \end{pmatrix} \exp \bigg[if_0 \bigg(\xi (1+\gamma^2\theta^2) + \frac{\xi^3}{3} \bigg) \bigg]^2 \\ &= \frac{e^2\omega^2 r_{\rm t}^2}{4\pi^2c^3\gamma^4} I(\Psi) \\ &= \frac{e^2\omega^2 r_{\rm t}^2}{4\pi^2c^3\gamma^4} I(\Psi) \\ &= \int d\xi d\eta \begin{pmatrix} \xi \eta \\ \Psi^2 \end{pmatrix} \exp \bigg[if_0 \bigg((1+\Psi^2)(\xi-\eta) + \frac{1}{3}(\xi^3-\eta^3) \bigg) \bigg] & \qquad \qquad \Psi \equiv \gamma\theta \end{split} \qquad \text{indices } \frac{\partial dt_{\rm ret}}{\partial t} = 2\int dX \exp \bigg[2if_0 X \bigg((1+\Psi^2) + \frac{X^2}{3} \bigg) \bigg] \int dY \begin{pmatrix} Y^2 - X^2 \\ \Psi^2 \end{pmatrix} \exp \bigg[2if_0 XY^2 \bigg] & \qquad \qquad X \equiv \frac{1}{2} (\xi-\eta) \quad Y \equiv \frac{1}{2} (\xi+\eta) \\ &= 2\int dX \sqrt{\frac{\pi}{2f_0|X|}} \bigg(\frac{i}{4f_0 X} - X^2 \\ \Psi^2 \bigg) \exp \bigg[i\frac{\mathrm{sgn}(X)\pi}{4} \bigg] \exp \bigg[2if_0 X \bigg((1+\Psi^2) + \frac{X^2}{3} \bigg) \bigg] & \qquad \qquad \qquad \chi \in \mathbb{R} \\ &= 2\int dY \exp[iSY^2] = \sqrt{\frac{\pi}{|S|}} \exp \bigg[i\frac{\mathrm{sgn}(S)\pi}{4} \bigg] \end{split}$$

 $\left| \int_{-\infty}^{\infty} dY Y^2 \exp[iSY^2] = \frac{i}{2S} \sqrt{\frac{\pi}{|S|}} \exp\left[i \frac{\operatorname{sgn}(S)\pi}{4}\right] \right|$

角度積分

$$\frac{d}{d\omega} {E_{\perp} \choose E_{\parallel}} = 2\pi \sin \alpha \int d\theta \frac{d}{d\omega d\Omega} {E_{\perp} \choose E_{\parallel}}$$

$$= \frac{e^{2} \omega^{2} r_{t}^{2}}{4\pi^{2} c^{3} \gamma^{4}} 2\pi \sin \alpha \int d\theta \mathbf{I}(\Psi)$$



$=\frac{e^2\omega^2r_{\rm t}^2}{\pi c^3\gamma^5}\sin\alpha\int dX\int d\Psi\sqrt{\frac{\pi}{2f_0|X|}}\left(\frac{i}{4f_0X}-X^2\right)\exp\left[i\frac{{\rm sgn}(X)\pi}{4}\right]\exp\left[2if_0X\left((1+\Psi^2)+\frac{X^2}{3}\right)\right]$

$$= -\frac{\chi e^2 \sin \alpha}{2c} \int dX \frac{1}{X^2} \left(\frac{1 + 4if_0 X^3}{1} \right) \exp \left[2if_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right]$$

$$\int_{-\infty}^{\infty} dY \exp[iSY^2] = \sqrt{\frac{\pi}{|S|}} \exp\left[i\frac{\operatorname{sgn}(S)\pi}{A}\right]$$

$$\int_{-\infty}^{\infty} dY Y^2 \exp[iSY^2] = \frac{i}{2S} \sqrt{\frac{\pi}{|S|}} \exp\left[i\frac{\operatorname{sgn}(S)\pi}{4}\right]$$

Expをsinとcosに分解し、積分に効かない奇関数を落とす

$$\frac{dE_{//}}{d\omega} = -\frac{\gamma e^2 \sin \alpha}{2c} \int dX \frac{1}{X^2} \cos \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right]$$

$$\frac{dE_{\perp}}{d\omega} = -\frac{\gamma e^2 \sin \alpha}{2c} \left\{ \int dX \frac{1}{X^2} \cos \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right] - 4 \int dX f_0 X \sin \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right] \right\}$$

整理整頓

部分積分をすると

$$-\int dX \frac{1}{X^2} \cos \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right] = 2f_0 \int dX \left(X + \frac{1}{X} \right) \sin \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right]$$

関数
$$I_{\pm} \equiv 2f_0 \int dX X^{\pm 1} \sin \left[2f_0 \left(X + \frac{X^2}{3} \right) \right]$$
 を導入すると

$$\frac{dE_{//}}{d\omega} = \frac{\gamma e^2 \sin \alpha}{2c} (I_+ + I_-) \qquad \qquad \frac{dE_{\perp}}{d\omega} = \frac{\gamma e^2 \sin \alpha}{2c} (3I_+ + I_-)$$

のように綺麗にまとまる

第二種変形ベッセル関数

$$K_{2/3}(x) = \frac{\sqrt{3}}{(3x/2)^{2/3}} \int_0^\infty dz z \sin\left[\frac{z^3}{3} + z\left(\frac{3x}{2}\right)^{2/3}\right]$$

$$I_+(x) = (12x)^{1/3} \int_0^\infty dz z \sin\left[\frac{z^3}{3} + z\left(\frac{3x}{2}\right)^{2/3}\right]$$

$$= \sqrt{3}x K_{2/3}(x) \equiv \sqrt{3}G(x)$$

整理整頓(2)

Lの方は

$$K_{1/3}(x) = \frac{\sqrt{3}}{(3x/2)^{1/3}} \int_0^\infty dz \cos\left[\frac{z^3}{3} + z\left(\frac{3x}{2}\right)^{2/3}\right]$$
 を用いる。 $x = \frac{4}{3} f_0 \quad z = \left(\frac{3x}{2}\right)^{1/3} X$

$$x \equiv \frac{4}{3} f_0 \quad z \equiv \left(\frac{3x}{2}\right)^{1/3} X$$

$$\frac{d}{dx} \left(\frac{1}{x} I_{-}(x) \right) = \frac{3}{(3x/2)^{1/3}} \int_{0}^{\infty} dz \cos \left[\frac{z^{3}}{3} + z \left(\frac{3x}{2} \right)^{2/3} \right] = \sqrt{3} K_{1/3}(x)$$

$$I_{-}(x) = -\sqrt{3}x \int_{x}^{\infty} dy K_{1/3}(y)$$

漸化式

$$2K'_n = -K_{n-1} - K_{n+1}$$
 $K_{-n} = K_n$ を用いると

$$I_{-}(x) = -2\sqrt{3}xK_{2/3}(x) + \sqrt{3}x\int_{x}^{\infty} dyK_{5/3}(y)$$

$$= -2\sqrt{3}G(x) + \sqrt{3}F(x)$$

つまリシンクロトロン関数

$$F(x) \equiv x \int_{x}^{\infty} dy K_{5/3}(y)$$

ゴール

一周期に1回このパルスが来るので、周期 $T = \frac{2\pi}{\omega_B} = \frac{2\pi\gamma mc}{eB}$ で割ると、

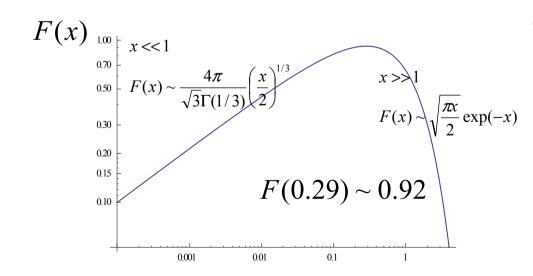
$$\frac{dE_{//}}{d\omega dt} = \frac{1}{T} \frac{dE_{//}}{d\omega} = \frac{\sqrt{3}e^3 B \sin \alpha}{4\pi mc^2} [F(x) + G(x)]$$

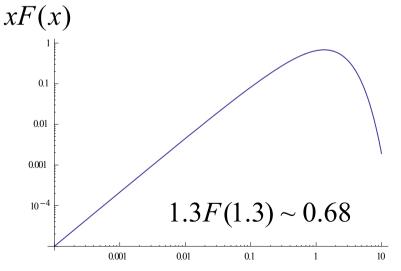
$$\frac{dE_{\perp}}{d\omega dt} = \frac{\sqrt{3}e^3B\sin\alpha}{4\pi mc^2} [F(x) - G(x)]$$

$$\frac{dE}{d\omega dt} = \frac{\sqrt{3}e^3B\sin\alpha}{2\pi mc^2}F(x)$$

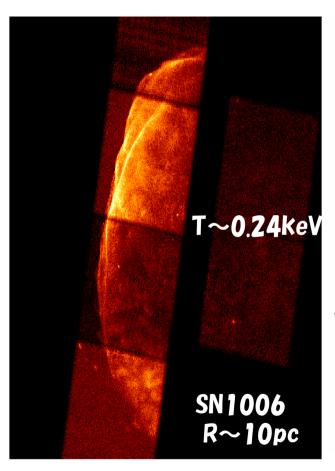
$$x = \frac{\omega}{\omega_{\rm c}} = \frac{2\omega}{3\gamma^3 \omega_{\rm B} \sin \alpha} = \frac{2mc\omega}{3\gamma^2 eB \sin \alpha}$$

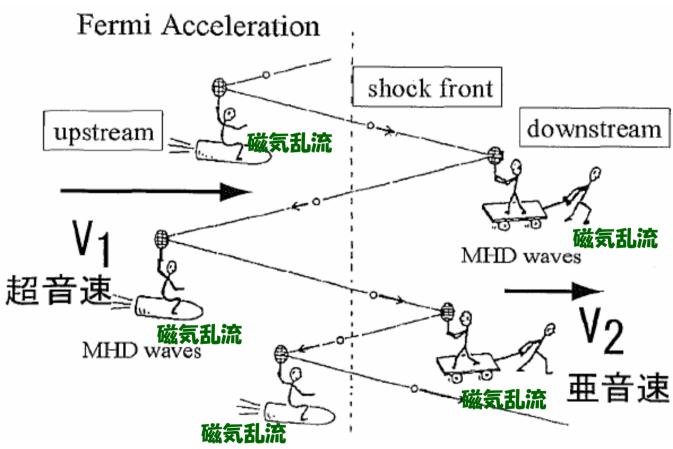
$$x = 1 \Longleftrightarrow \omega = \frac{3\gamma^2 eB \sin \alpha}{2mc}$$



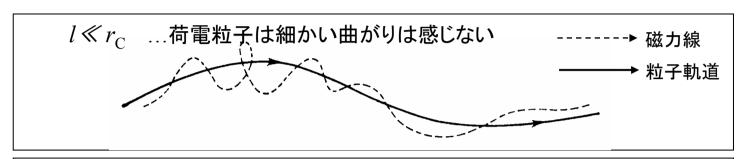


衝擊波統計加速





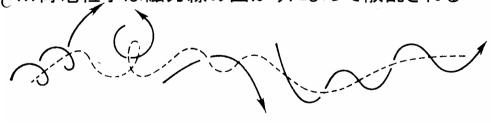
乱れた磁場と粒子の相互作用



 $l \gg r_{\rm C}$ …荷電粒子は磁力線の曲がりに沿って運動

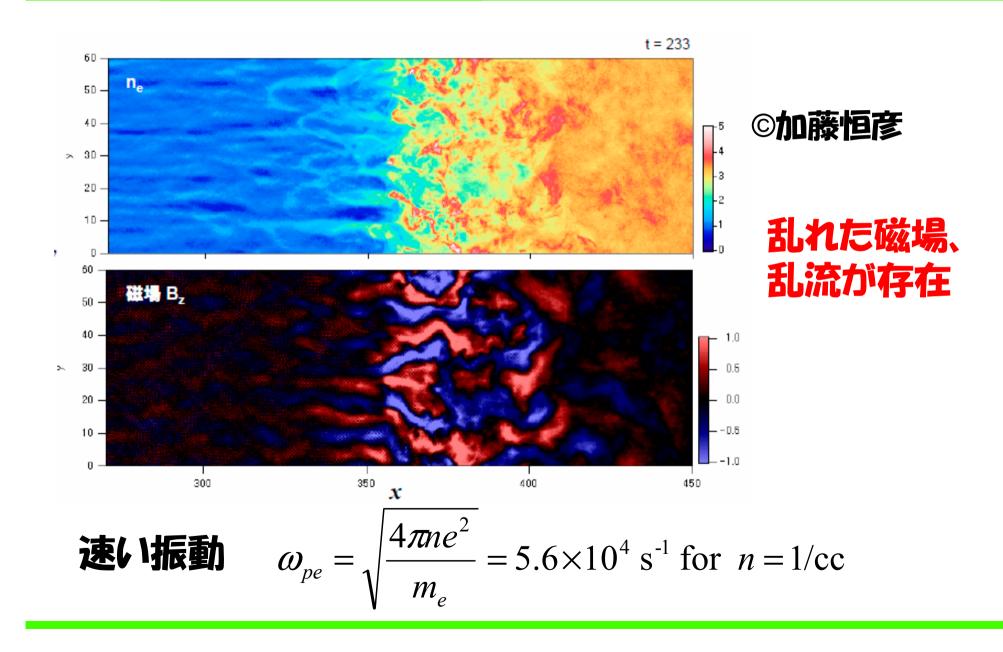


 $l \sim r_{\rm C}$ …荷電粒子は磁力線の曲がりによって散乱される

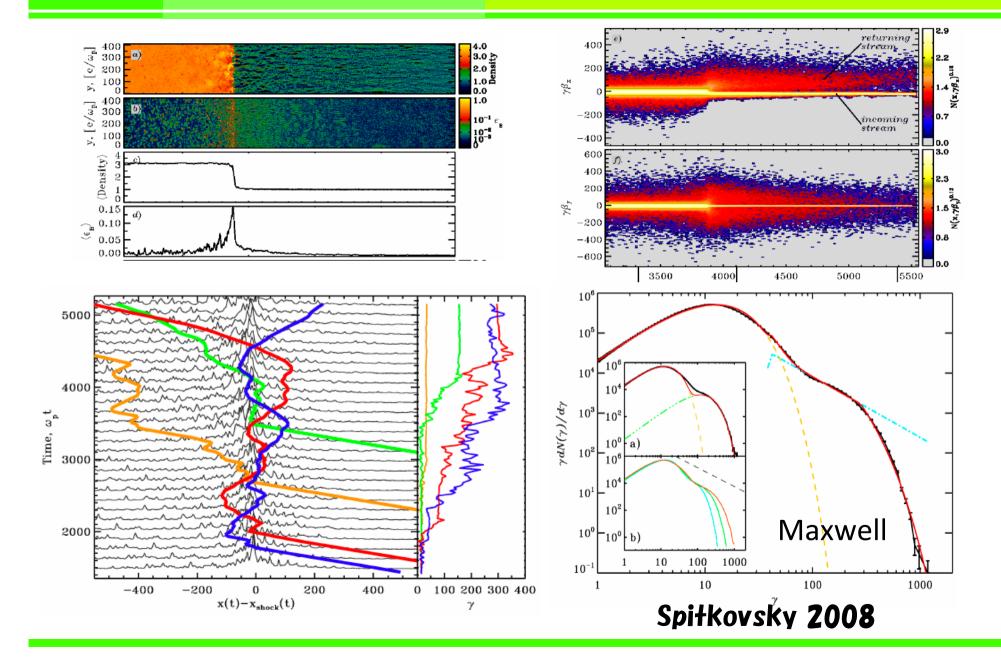


ラーマー半径 アレ〜磁場の乱れのスケール

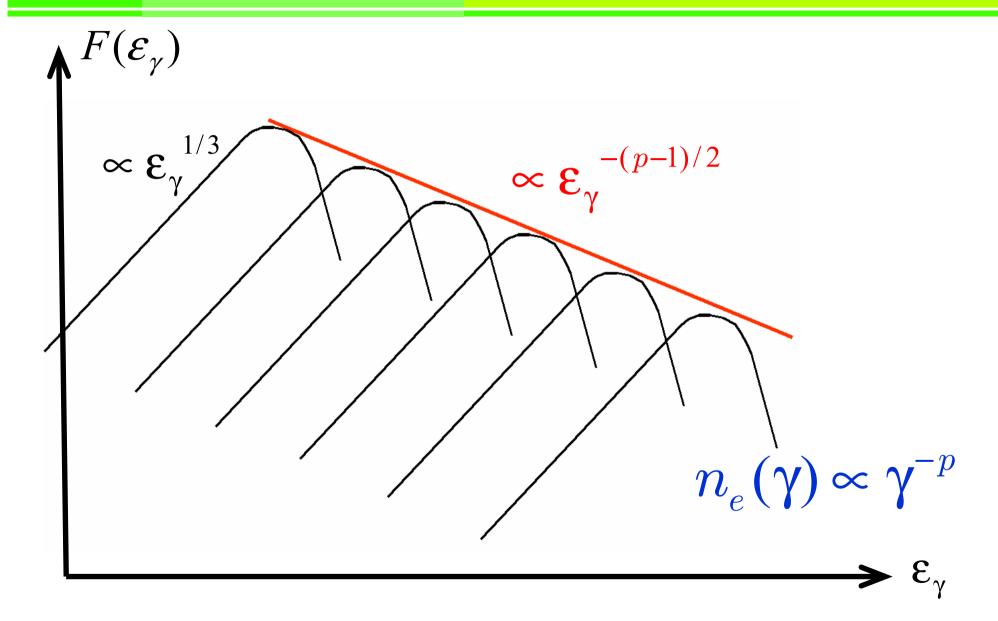
無衝突衝撃波シミュレーション



シミュレーションで実現された粒子加速



Power-law電子からの放射



正確な積分

公式
$$\int_0^\infty x^\mu K_n(x) dx = 2^{\mu-1} \Gamma\left(\frac{\mu+n+1}{2}\right) \Gamma\left(\frac{\mu-n+1}{2}\right)$$
 から、
$$\int_0^\infty x^\mu G(x) dx = 2^\mu \Gamma\left(\frac{\mu}{2} + \frac{4}{3}\right) \Gamma\left(\frac{\mu}{2} + \frac{2}{3}\right)$$

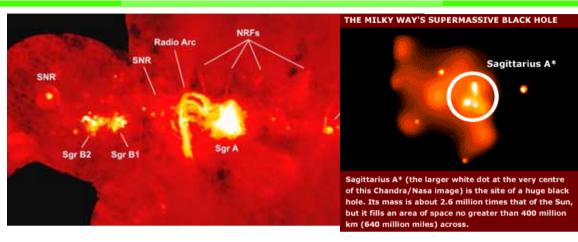
$$\int_0^\infty x^\mu F(x) dx = \frac{2^{\mu+1}}{\mu+2} \Gamma\left(\frac{\mu}{2} + \frac{7}{3}\right) \Gamma\left(\frac{\mu}{2} + \frac{2}{3}\right)$$

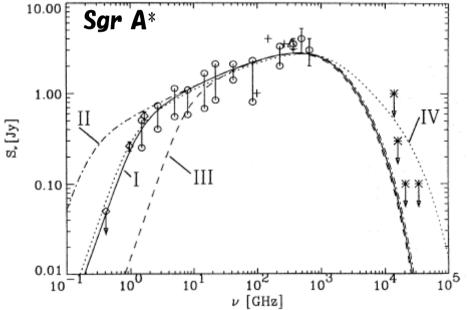
$$\frac{dE}{dtd\omega dV} = \int d\gamma m_{\rm e}(\gamma) \frac{dE}{dtd\omega} = C \int d\gamma \gamma^{-p} \frac{\sqrt{3}e^3 B \sin \alpha}{2\pi m_{\rm e}c^2} F\left(\frac{\omega}{\omega_{\rm c}}\right)$$

$$= \left[C \frac{\sqrt{3}e^3 B \sin \alpha}{2(p+1)\pi m_{\rm e}c^2} \Gamma\left(\frac{p}{4} + \frac{19}{12}\right) \Gamma\left(\frac{p}{4} - \frac{1}{12}\right) \left(\frac{m_{\rm e}c\omega}{3eB \sin \alpha}\right)^{-(p-1)/2} \text{ erg s}^{-1} \text{ Hz}^{-1} \text{ cm}^{-3}\right]$$

$$\overline{\sin \alpha} = \frac{\pi}{4}$$

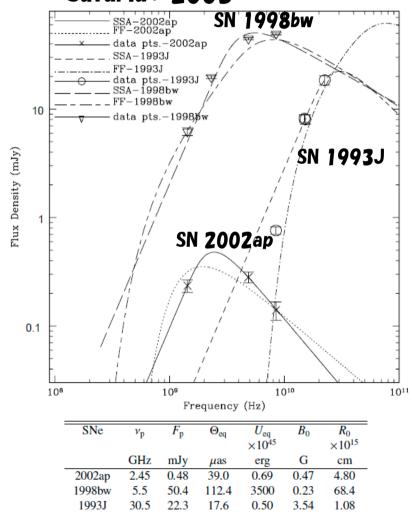
シンクロトロン自己吸収





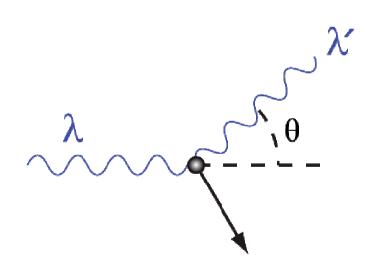
Beckert+ 1996 B~10G(Free-freeでも説明可)

SN爆発後11日後の電波スペクトル Sutaria+ 2003



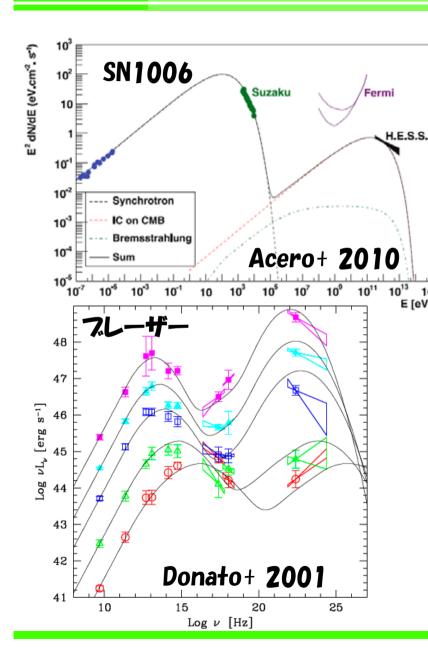
7. コンプトン散乱

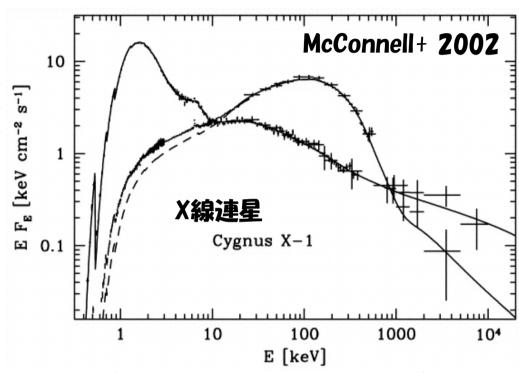
- ・電子静止系での散乱
- Klein-Nishina断面積
- ・相対論的な電子による散乱
- ・逆コンプトン散乱
- ・コンプトン ソーパラメータ
- Kompaneets方程式
- · Sunyaev-Zel'dovich 効果



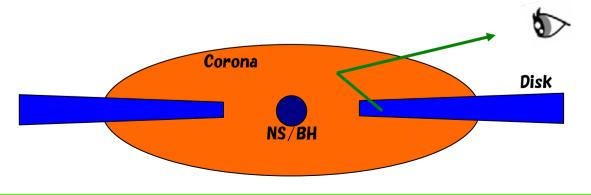
電子による光子の散乱

天体における逆コンプトン散乱





~0.2keVの熱的光子を90keVのコロナが叩き上げている



Crab Nebula: Remnant of an Exploded Star (Supernova) Crab nebula **300MeV-GeV** >GeV Radio wave (VLA) Infrared radiation (Spitzer) Visible light (Hubble) Pixel Size log₁₀(v/Hz) Ultraviolet radiation (Astro-1) Low-energy X-ray (Chandra) High-energy X-ray (HEFT) *** 15 min exposure *** 10 15 20 25 -7 CGRO COMPTEL CGRO EGRET HESS -8 MAGIC CANGAROO VERITAS $\log_{10}(\mathrm{vf_v/erg/(cm^2\;s)})$ **HEGRA** □ CELESTE -9 -10 -122 10 12 14 0 10² 10³ 10⁴ 10⁵ 10⁶ 10⁷ 10⁸ 10 log₁₀(E/eV) Energy [MeV] Abdo+ 2010 Aharonian+ 2004

電磁場と電子場の演算子

$$\hat{A}_l^{\mu} = \sum_l \int \frac{d^3k}{(2\pi)^{3/2}} \sqrt{\frac{hc}{k_0}} \Big(\varepsilon_l^{\mu} \hat{a}_l(k) e^{-ik \cdot x} + \varepsilon_l^{*\mu} \hat{a}_l^{\dagger}(k) e^{ik \cdot x} \Big), \qquad \text{ (a.2.18)}$$

$$\hat{\Psi}_{i} = \sum_{i} \int \frac{d^{3}p}{(2\pi)^{3/2}} \left(u_{i}(p)\hat{c}_{i}(p)e^{-ip\cdot x} + v_{i}(p)\hat{d}_{i}^{\dagger}(p)e^{ip\cdot x} \right)$$
 スピン状態: i

交換関係

$$[\hat{a}_{l}(k), \hat{a}_{m}^{\dagger}(k')] = \delta_{lm} \delta^{3}(\mathbf{k} - \mathbf{k'}), \{\hat{c}_{i}(p), \hat{c}_{j}^{\dagger}(p')\} = \{\hat{d}_{i}(p), \hat{d}_{j}^{\dagger}(p')\} = \delta_{ij} \delta^{3}(\mathbf{p} - \mathbf{p'})$$

Zeitschrift für Physik

スピノールの縮約

$$u_i^{\dagger}u_j = v_i^{\dagger}v_j = \delta_{ij}$$

波数ベクトルの内積

$$k \cdot k = k^{\mu} k_{\mu} = 0, \ p \cdot p = \left(\frac{m_{\rm e} c}{\hbar}\right)^2$$

Über die Streuung von Strahlung durch freie Elektronen nach der neuen relativistischen Quantendynamik von Dirac.

Von O. Klein und Y. Nishina in Kopenhagen.

(Eingegangen am 30. Oktober 1928.)

Auf Grund der neuen, von Dirac entwickelten relativistischen Quantendynamik wird die Intensität der Comptonstreustrahlung berechnet. Das Resultat zeigt Abweichungen von den entsprechenden Dirac-Gordonschen Formeln, die von der zweiten Größenordnung hinsichtlich des Verhältnisses der Energie des primären Lichtquants zu der Ruheenergie des Elektrons sind.

ハミルトニアン密度の相互作用項

$$\mathcal{H}_{\rm int} = -e\,\overline{\psi}\gamma^{\mu}\psi A_{\mu}$$

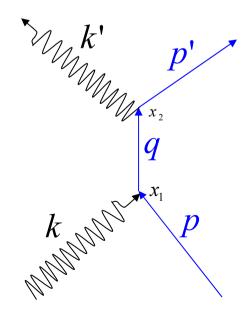
時間推進演算子は $ho^{irac{H_{
m int}}{\hbar}t}$ なの

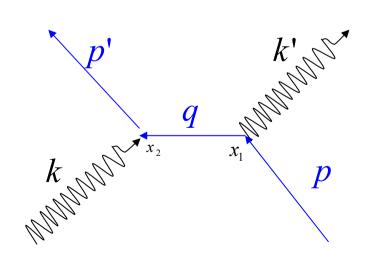
二次微小量まで考えるとS行列

$$S = 1 + \frac{i}{\hbar c} \int d^4 x \mathcal{H}_{\text{int}}(x) + \frac{i^2}{2(\hbar c)^2} \int d^4 x_1 d^4 x_2 \underline{T(\mathcal{H}_{\text{int}}(x_1)\mathcal{H}_{\text{int}}(x_2))}$$
時間順序積

s-channel

t-channel





仮に設定された体積と時間のスケール:V,T

$$\Rightarrow A_l^{\mu} = \sqrt{\frac{hc}{Vk_0}} \varepsilon_l^{\mu} \exp[-ik \cdot x], \ \Psi_i = \frac{1}{\sqrt{V}} u_i \exp[-ip \cdot x]$$

電子静止系で考え、反応の充分前と後ではDirac eq. $\left(i\gamma^{\mu}\partial_{\mu}-\frac{m_{\rm e}c}{\hbar}\right)u_{i}=0$ を満たしているので、

$$\left\langle k'p'\middle|S\middle|kp
ight
angle = rac{(2\pi)^5ie^2}{V^2\hbar c\sqrt{k_0k'_0}} \, \delta^4(p+k-p'-k')ar{u'}_i igg(rac{iar{m{x}}'m{x}k}{2\,p\cdot k} + rac{iar{m{x}}ar{m{x}}'k'}{2\,p\cdot k'}igg)\!u_j$$
 整播幅

確率振幅

$$M = n\sigma vT$$
, $n = 1/V$, $v = c$

$$\sigma = \sum_{p'} \sum_{k'} \frac{V}{cT} M$$

$$= \frac{1}{2} \sum_{l} \sum_{m} \frac{V}{(2\pi)^{3}} \int d^{3}p' \frac{V}{(2\pi)^{3}} \int d^{3}k' \frac{V}{cT} M$$

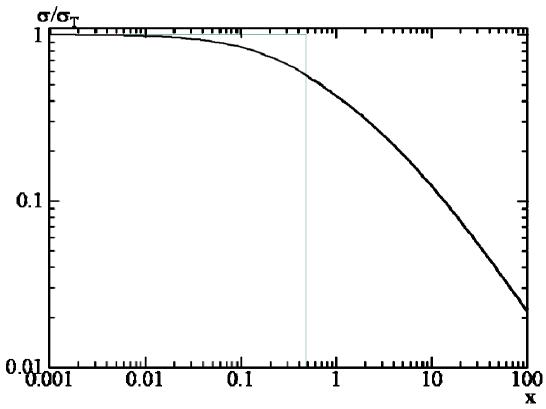
$$= \frac{e^{4}}{2(\hbar c)^{2}} \int d^{3}k' \frac{\delta(p_{0} + k_{0} - p'_{0} - k'_{0})}{k_{0}k'_{0} p_{0}p'_{0}} \left[\frac{k'_{0}}{k_{0}} + \frac{k_{0}}{k'_{0}} - \sin^{2}\theta \right]$$

$$\frac{d\sigma}{d\Omega_{k'}} = \frac{e^4}{2(m_e c^2)^2} \left(\frac{k'_0}{k_0}\right)^2 \left[\frac{k'_0}{k_0} + \frac{k_0}{k'_0} - \sin^2\theta\right]
= \frac{r_e^2}{2} \left(\frac{v'}{v}\right)^2 \left[\frac{v'}{v} + \frac{v}{v'} - \sin^2\theta\right]$$

Klein-Nishina断面積

$$\sigma = \int d\Omega_{k'} \frac{d\sigma}{d\Omega_{k'}}$$

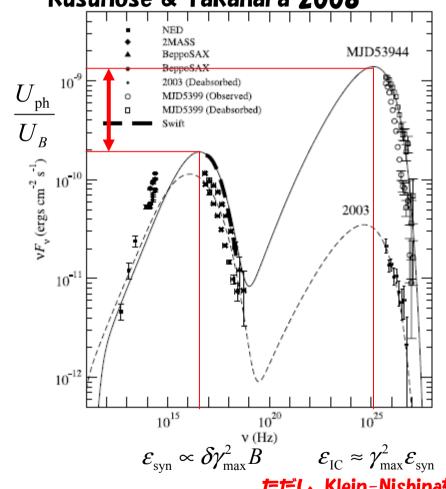
$$= \frac{3\sigma_{\rm T}}{4} \left[\frac{1+x}{x^3} \left\{ \frac{2x(1+x)}{1+2x} - \ln(1+2x) \right\} + \frac{1}{2x} \ln(1+2x) - \frac{1+3x}{(1+2x)^2} \right] \qquad x \equiv \frac{h v}{m_{\rm e} c^2}$$



$$\begin{cases} \sigma \approx \sigma_{\text{T}} & \text{for } x << 1 \\ \approx \frac{3\sigma_{\text{T}}}{8x} \left(\ln 2x + \frac{1}{2} \right) & \text{for } x >> 1 \end{cases}$$

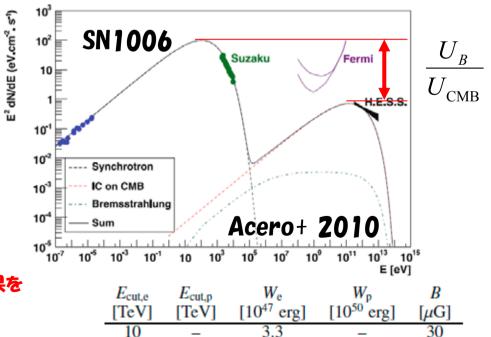
ICからの磁場の推定

PKS 2155-304 Kusunose & Takahara 2008



ただし、Klein-Nishina効果を 考慮すべき

Γ	90
<i>D</i>	90
B (G)	0.1
R (10 ¹⁴ cm)	9.6
<i>p</i>	1.9
$\gamma_{\rm max} \ (10^4) \dots$	8.0
γ_{\min}	10



光子散乱率(電子静止系)

等方で単色のソースの強度 number intensity [photons/cm²/s/eV/str]

$$\frac{I(\varepsilon)}{\varepsilon} \equiv N(\varepsilon) = N_0 \delta(\varepsilon - \varepsilon_0)$$

ローレンツ不変
$$I/\varepsilon^3 = N/\varepsilon^2$$
 $\varepsilon' = \varepsilon \gamma (1-\beta \mu) \Leftrightarrow \varepsilon = \varepsilon' \gamma (1+\beta \mu')$

$$\longrightarrow N'(\varepsilon') = N_0 \left(\frac{\varepsilon'}{\varepsilon}\right)^2 \delta(\varepsilon - \varepsilon_0) = \left(\frac{\varepsilon'}{\varepsilon_0}\right)^2 \frac{N_0}{\gamma \beta \varepsilon'} \delta(\mu' - \frac{\varepsilon_0 - \gamma \varepsilon'}{\gamma \beta \varepsilon'})$$

電子静止系での電子1個当たりの散乱レート [photons/s/eV/str]

入射角度平均
$$\frac{dN'}{dt'd\mathcal{E}_1'd\Omega'} = \sigma_{\mathrm{T}} \frac{1}{2} \int_{-1}^{1} N'(\mathcal{E}_1', \mu') d\mu'$$
 \longrightarrow $\sigma \approx \sigma_{\mathrm{T}} \quad \mathcal{E}_1' \approx \mathcal{E}'$

$$\mu' = \frac{\mathcal{E}_0 - \gamma \mathcal{E}_1'}{\gamma \beta \mathcal{E}_1'}$$
 $-1 < \mu' < 1 \Rightarrow \frac{\mathcal{E}_0}{\gamma (1+\beta)} < \mathcal{E}_1' = \mathcal{E}' < \frac{\mathcal{E}_0}{\gamma (1-\beta)}$ 電子静止系で、 光子のエネルギーが 広がる

散乱光子のエネルギーの広がり

$$\varepsilon_1' = \varepsilon_1 \gamma (1 - \beta \mu_1) \Rightarrow \frac{\varepsilon_0}{\gamma^2 (1 + \beta) (1 - \beta \mu_1)} < \varepsilon_1 < \frac{\varepsilon_0}{\gamma (1 - \beta) (1 - \beta \mu_1)}$$

μιの大小関係に書き換える

$$\varepsilon_1 < \varepsilon_0 \Rightarrow -1 < \mu_1 < \frac{1}{\beta} \left(1 - \frac{\varepsilon_0}{\varepsilon_1} (1 - \beta) \right)$$

$$\varepsilon_1 > \varepsilon_0 \Rightarrow \frac{1}{\beta} \left(1 - \frac{\varepsilon_0}{\varepsilon_1} (1 + \beta) \right) < \mu_1 < 1$$

ローレンツ不変
$$\frac{j_{\varepsilon}}{\varepsilon^{2}} = \frac{1}{\varepsilon} \frac{dN}{dt d\varepsilon d\Omega dV}$$

$$\frac{dN}{dtd\varepsilon_{1}d\Omega dV} = \left(\frac{\varepsilon_{1}}{\varepsilon_{1}'}\right) \frac{dN'}{dt'd\varepsilon'_{1}d\Omega' dV'} = \left(\frac{\varepsilon_{1}}{\varepsilon_{1}'}\right) n'_{e} \frac{dN'}{dt'd\varepsilon'_{1}d\Omega'} = \left(\frac{\varepsilon_{1}}{\varepsilon_{1}'}\right) \frac{n_{e}}{\gamma} \frac{dN'}{dt'd\varepsilon'_{1}d\Omega'}$$

$$\frac{dN'}{dt'd\varepsilon' d\Omega' dV'} = n'_{e} \frac{dN'}{dt'd\varepsilon' d\Omega'}$$

$$n'_{e} = \frac{n_{e}}{\gamma}$$

Emission function

$$\frac{dN}{dtd\varepsilon d\Omega dV} = \frac{n_{\rm e}\sigma_{\rm T}\varepsilon N_0}{2\gamma^2\beta\varepsilon_0^2} \frac{1}{2}\int d\mu_1$$
 散乱角度平均、積分範囲に注
$$= \frac{n_{\rm e}\sigma_{\rm T}N_0}{4\gamma^2\beta^2\varepsilon_0} \left[1 + \beta - \frac{\varepsilon}{\varepsilon_0}(1 - \beta)\right] \text{ for } \varepsilon > \varepsilon_0$$

$$\approx \frac{3n_{\rm e}\sigma_{\rm T}N_0}{4\gamma^2\varepsilon_0} \frac{2}{3}(1 - x) \qquad \qquad x \equiv \frac{\varepsilon_1}{4\gamma^2\varepsilon_0} < 1$$

$$x <<1 \Rightarrow \text{const.}$$

Klein-Nishinaに沿った散乱角度分布(非等方散乱)

$$\Rightarrow \frac{3n_e \sigma_T N_0}{4\gamma^2 \varepsilon_0} \left(2x \ln x + x + 1 - 2x^2\right), x \equiv \frac{\varepsilon_1}{4\gamma^2 \varepsilon_0}$$

エネルギー分布を考慮

先ほどの式を書き直す。

$$\frac{dN}{dt d\varepsilon d\Omega dV} = \frac{3n_e \sigma_T N_0}{\varepsilon} xg(x), \quad g(x) = (2x \ln x + x + 1 - 2x^2), x = \frac{\varepsilon}{4\gamma^2 \varepsilon_0}$$

$$j_{\varepsilon} = \frac{dE}{dt d\varepsilon d\Omega dV} = \varepsilon \frac{dN}{dt d\varepsilon d\Omega dV} = 3n_e \sigma_T N_0 xg(x)$$

電子と光子のエネルギー分布を考える $N_0 \Rightarrow \frac{cn_\gamma(\mathcal{E}_0)}{4\pi} d\mathcal{E}_0, \; n_e \Rightarrow n_e(\gamma) d\gamma$

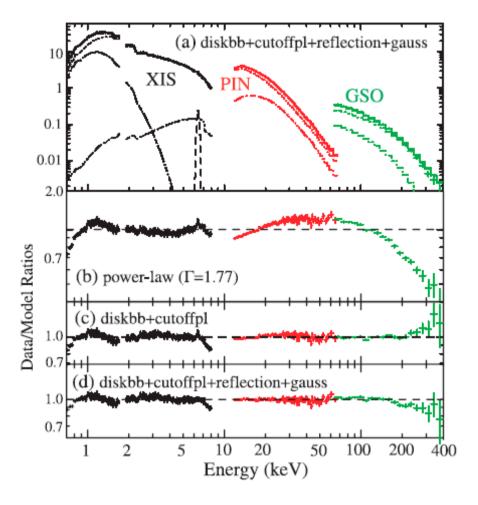
$$\frac{dE}{dt d\varepsilon dV} = 4\pi \frac{dE}{dt d\varepsilon d\Omega dV} = 3c\sigma_T \int d\varepsilon_0 \varepsilon_0 n_{\gamma}(\varepsilon_0) \int d\gamma n_e(\gamma) xg(x)$$

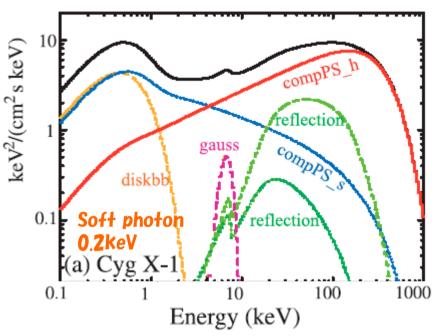
$$\propto \int d\varepsilon_0 \varepsilon_0 n_{\gamma}(\varepsilon_0) \int d\gamma \frac{\varepsilon}{\varepsilon_0} \gamma^{-(2+p)} g(x) \qquad \gamma \propto \sqrt{\frac{\varepsilon}{x\varepsilon_0}}, d\gamma = -\frac{1}{4x^{3/2}} \left(\frac{\varepsilon}{\varepsilon_0}\right)^{1/2} dx$$

$$\Rightarrow \frac{dE}{dt d\varepsilon dV} \propto \varepsilon^{-(p-1)/2} \int d\varepsilon_0 \varepsilon_0^{-(p-1)/2} n_{\gamma}(\varepsilon_0) \int dx x^{(p-1)/2} g(x)$$

Cyg X-1

Makishima+ 2008





 $T_e \sim 100 \text{keV}$ $\tau \sim 1.5$

$$y = \frac{4T_{\rm e}}{m_{\rm e}c^2}\tau^2 \approx 1.7$$

Kompaneets Eq.

$$f_{\gamma}d^{3}pd^{3}x = \mathbf{m}_{\nu} \frac{d^{3}pd^{3}x}{(2\pi\hbar)^{3}} \qquad \mathbf{2ランク分布なら} \qquad \mathbf{m}_{\nu} = \frac{2}{\exp(h\nu/T) - 1}$$

$$(\boldsymbol{p}, \boldsymbol{\nu}) \Leftrightarrow (\boldsymbol{p}_{I}, \boldsymbol{\nu}_{1})$$

$$\frac{\partial \mathbf{m}_{\nu}}{\partial t} = c\int d^{3}p_{e} \int d\Omega \frac{d\sigma}{d\Omega} (\Delta\nu) \Big[f_{e}(\boldsymbol{p}_{I}) \mathbf{m}_{\nu_{1}} \underbrace{(1 + \mathbf{m}_{\nu}) - f_{e}(\boldsymbol{p}) \mathbf{m}_{\nu} (1 + \mathbf{m}_{\nu_{1}})} \Big]$$

$$\Delta\nu = \nu_{1} - \nu << \nu$$

$$\mathbf{m}_{\nu_{1}} \cong \mathbf{m}_{\nu} + \Delta\nu \frac{\partial \mathbf{m}_{\nu}}{\partial \nu} + \frac{1}{2}\Delta\nu^{2} \frac{\partial^{2}\mathbf{m}_{\nu}}{\partial \nu^{2}}$$

$$x \equiv \frac{h\nu}{T_{e}}, \quad \Delta \equiv \frac{h\Delta\nu}{T_{e}} \qquad \mathbf{m'}_{\nu} \equiv \frac{\partial \mathbf{m}_{\nu}}{\partial x}$$

$$\frac{\partial f_{e}(E)}{\partial E} = -\frac{1}{T}f_{e}(E) \qquad f_{e}(E_{1}) \cong f_{e}(E) \Big[1 + \Delta + \frac{\Delta^{2}}{2} \Big]$$

Kompaneets Eq.

$$\frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{m}_{v}}{\partial t} = (\mathbf{m}'_{v} + \mathbf{m}_{v}(1 + \mathbf{m}_{v})) \int d^{3}p_{e} \int d\Omega \frac{d\sigma}{d\Omega} f_{e}(\mathbf{p}) \Delta
+ \left(\frac{1}{2} \mathbf{m}''_{v} + \mathbf{m}'_{v}(1 + \mathbf{m}_{v}) + \frac{1}{2} \mathbf{m}_{v}(1 + \mathbf{m}_{v})\right) \int d^{3}p_{e} \int d\Omega \frac{d\sigma}{d\Omega} f_{e}(\mathbf{p}) \Delta^{2}$$

エネルギー・運動量の保存から

$$n = \frac{k}{k}$$

$$h\Delta v = \frac{h v c \boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{n}_1 - \boldsymbol{n}) - h^2 v^2 (1 - \boldsymbol{n}_1 \cdot \boldsymbol{n})}{E - c \boldsymbol{p} \cdot \boldsymbol{n}_1 + h v (1 - \boldsymbol{n}_1 \cdot \boldsymbol{n})} \approx \frac{h v}{m_e c} \boldsymbol{p} \cdot (\boldsymbol{n}_1 - \boldsymbol{n})$$

$$|\boldsymbol{n}_{I} - \boldsymbol{n}|^{2} = 2(1 - \cos \theta)$$

$$\frac{d\sigma_{T}}{d\Omega} = \frac{1}{2}r_{e}^{2}(1 + \cos^{2} \theta)$$

温度平衡になった時、右辺がゼロとなるなどの条件を考えると、

Kompaneets Eq.

$$\frac{\partial \mathbf{m}_{v}}{\partial t} = c n_{e} \sigma_{T} \frac{T_{e}}{m_{e} c^{2}} \frac{1}{x^{2}} \frac{\partial}{\partial x} \left[x^{4} \left(\mathbf{m'}_{v} + \mathbf{m}_{v} + \mathbf{m'}_{v}^{2} \right) \right]$$

光子も "ほぼ" プランク分布で、
$$T_{\rm e} >> T_{\gamma}$$
 $z \equiv \frac{h \nu}{T_{\rm e}}$

$$\frac{\partial \mathbf{n}_{v}}{\partial t} \cong c n_{e} \sigma_{T} \frac{T_{e}}{m_{e} c^{2}} \frac{1}{z^{2}} \frac{\partial}{\partial z} \left[z^{4} \frac{\partial \mathbf{n}_{v}}{\partial z} \right]$$

$$y \equiv \frac{T_{\rm e}}{m_{\rm e}c^2} \int_{-\infty}^t dt c n_{\rm e} \sigma_{\rm T} \approx \frac{T_{\rm e}}{m_{\rm e}c^2} \max(\tau, \tau^2)$$

$$\frac{\delta n_{\nu}}{n_{\nu}} \cong -2y \text{ for } z <<1 \Rightarrow \frac{\delta n_{\nu}}{n_{\nu}} \cong \frac{\delta T_{\gamma}}{T_{\gamma}}$$

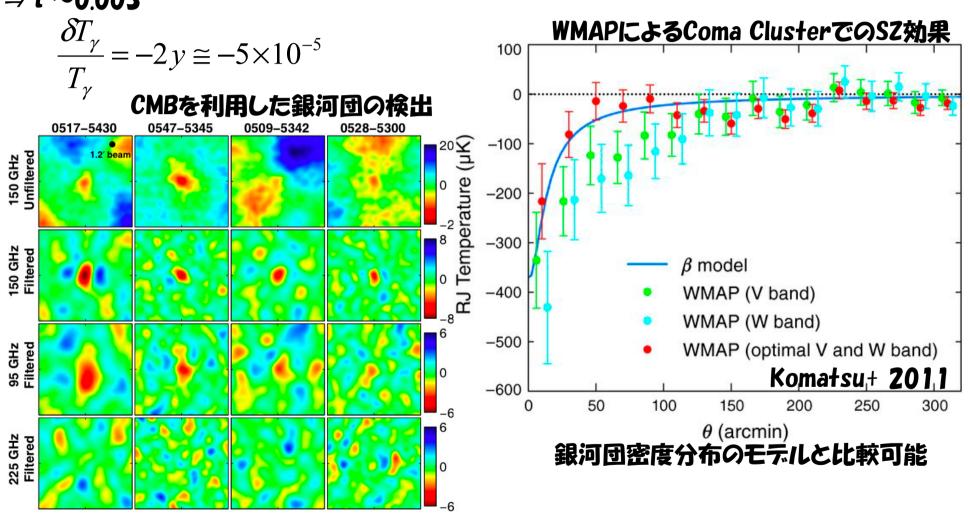
$$\cong yz^2 \text{ for } z >> 1$$

レイリー・ジーンズ領域 光子数密度∝ ε T

Sunyaev-Zel'dovich効果

銀河団コアのサイズ200kpc、密度0.003個cm-3、温度4keV ⇒ τ ~0.003

Staniszewski+ 2009



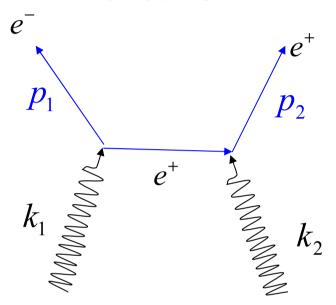
8. その他の重要な反応(おまけ)

- ·電子·陽電子対生成
- ・ハドロンの反応

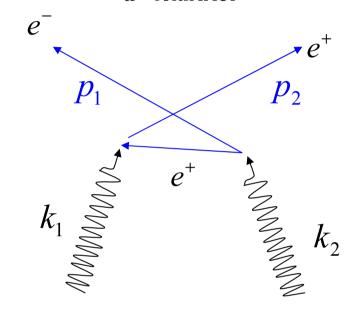
古典電磁気学では扱えない反応

電子·陽電子対生成

s-channel



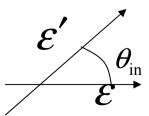
u-channel



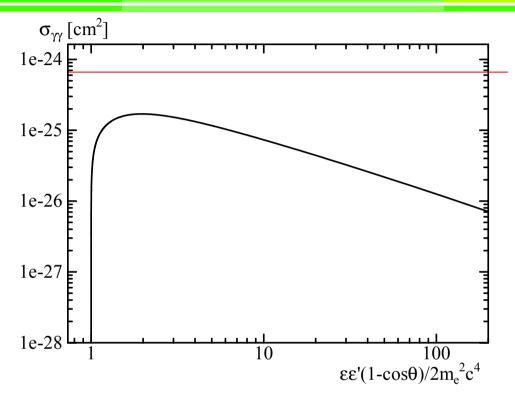
$$\sigma_{\gamma\gamma} = \frac{3\sigma_{\rm T}}{16} (1 - y^2) \left[(3 - y^4) \ln \frac{1 + y}{1 - y} - 2y(2 - y^2) \right]$$
$$y^2 \equiv 1 - \frac{2m_{\rm e}^2 c^4}{\varepsilon \dot{\varepsilon} (1 - \cos \theta_{\rm in})} < 1$$
$$\varepsilon' \not \sim \theta$$

$$y^2 \equiv 1 - \frac{2m_{\rm e}^2 c^4}{\varepsilon \acute{\varepsilon} (1 - \cos \theta_{\rm in})} < 1$$

$$\varepsilon\varepsilon'(1-\cos\theta_{\rm in})>2m_{\rm e}^2c^4$$
 の時だけ起こる反応。



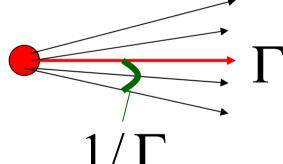
電子·陽電子対生成



トムソン散乱

光子の運動方向が揃っていれば、 つまい $\cos\theta_{\rm in}\approx 1$ 対消滅しなくてすむ。

方向を揃えるには? 相対論的ビーミングの効果



$$t_{\gamma\gamma}^{-1}(\varepsilon) = \frac{c}{2} \int_{\varepsilon_{\min}}^{\infty} d\varepsilon \int_{-1}^{1} d(\cos\theta_{\text{in}}) (1 - \cos\theta_{\text{in}}) \sigma_{\gamma\gamma} n_{\gamma}(\varepsilon)$$

$$\tau_{\gamma\gamma} = \frac{R}{ct_{\gamma\gamma}}$$

ハドロンによる反応

$$p + p \rightarrow p + p + \pi^{0}$$
$$\rightarrow p + n + \pi^{+}$$

$$\sigma_{pp} \cong 0.05 \sigma_{\mathrm{T}}$$

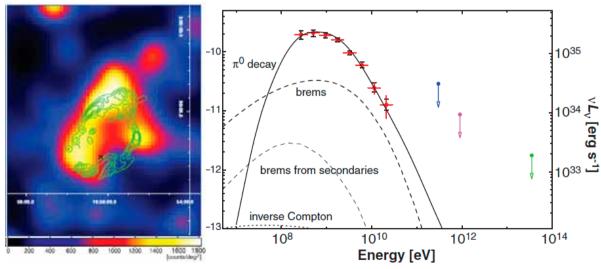
$$\pi^0:\pi^+\approx 1:2$$

$\pi^0 o \gamma + \gamma$

$$\pi^{+} \to \mu^{+} + \nu_{\mu}$$

$$\mu^{+} \to e^{+} + \nu_{e} + \overline{\nu}_{\mu}$$

元の陽子の30%ほどのエネルギーがパイオンへ。



$$m_{\pi}c^2 \cong 135 \text{MeV}$$

SNR W44 (Abdo+ 2010)

ハドロンによる反応

$$p+\gamma \to p+\pi^0$$
 $\to n+\pi^+$ 20%ほどのエネルギーがパイオンへ。 10^{-27} 10^{-28} 200 400 600 800 1000 ϵ " [MeV]

最高エネルギー宇宙線 10²⁰eV→ γ ~ 10¹¹

CMB光子の平均エネルギー 3×3K~10⁻³eV

陽子静止系では γ 10-3eV~100MeV

光子数密度 400cm-3 300MeVを超えている光子は、 (ざっくり) 1/100くらいか?

平均自由行程 1/n σ~100Mpc

陽子静止系での光子のエネルギー